
真・恋姫†無双 転生万屋さん

蓮華草

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真・恋姫†無双 転生万屋さん

【Zコード】

Z9044P

【作者名】

蓮華草

【あらすじ】

恋姫無双の世界に転生した主人公は新しい外史の中でどのような物語を紡いでいくのか？作者はこの作品が処女作の上に、原作を知らない、非常に駄文、更新が遅いなど、ここには書ききれないほどの欠点がございますが温かい目でどうぞよろしくお願ひします。

第1話

恋姫無双 転生万屋さん

「あ～暇だなあ～、死のつかなあ～」

いやだつてしようがないじゃん暇なんだもん。

ああ、自己紹介がまだだつたな。

俺の名前は、徐庶、字は、元直、て言つんだよひしづな。

特技は……特にないな、俗に言つ器用貧乏でこいつやつかな、
でも、俺にはすうじに秘密があるんだよこれが、

まあお察しの方もいると思ひナビとつあえず回想スタート。

（回想）

「あれ…！」はは？」だ？」

「よつやく気がついたみたいね」

声がするほうを見てみると綺麗な女性がいました。

どれくらい綺麗かといつと、街を歩いたら100人中100人が振り向くであらう美少女だ。

髪はきれいな銀色のロングで、肌は上質な陶器の様に白い。

スタイルも美しく、出るといけない出でこい、それでないとこの人は締まつていてる。

身長は160前後といったところかな。

多分だけど、オーラとか出てるね、なんか神々しい感じがする。

世界三大美女であるクレオパトラとか楊貴妃も真っ青なほどだ。

まあ、クレオパトラとか見たことないからわからないけどね。

「.....」

おっといけない、考えすぎていたようだ。女性が見てわかるほどイリつこしてくる。

いや、顔は笑つてゐるんだけどなんといつか、まあ諸君らならわかってくれると思います。

「やつこえば、いじはめどいなんですか？」

「いじは、时空の狭間よ、」

「时空の狭間？」

「簡単に言えば神の住む場所、といったところかしら」

「神の住むところか、普通の人人が言つたなら、

ハハハ、何言つてんだよ、頭でも強く打ちつけたのがジヨニー、といいながら

速攻で119に連絡しているといふだろ。

だが、彼女が言つとそれがホントのよつに聞こえてしまつのがとても不思議だ。

「あなたには、ある世界に行つてもうつわね。」

……はい？ それって所謂転生つてやつですか？

いろいろな疑問が頭の中をぐるぐる回るが神はそれを整理させる時間てくれた。

「いや、ちよつとま

「じゃあね、頑張つてね」

彼女は俺の言葉を無視して指を鳴らした。

すると突然足元に穴が空き俺は落ちて行つた。

そして時間は進んでいき現在に至る。

（回想終了）

「……今思つとたくさん疑問があるんだよなあ～

なぜ俺だったのか?、理由はなんなのか?、田畠はなんなのか?、

疑問は湧きない、けれどもはやせない。

「…だつたら別にいいか、特に問題があるわけでもない。」

わい、今田はお惣さんも来ないし、畠寝でもしますかね。

「…………わん、…………わん、徐無さん!」

「…………ん? なんだ Aさんか」

名前を呼ばれたので起きてみるとわいは Aさんがいた。

「だから Aさんじゃないつて何回呼べばわかるの?」

「まあいこじやん、みんないつも呼んでるんだからわい」

説明しよう、 Aさんとわいは同じ辺に住んでるおじこさんである。

Aさんは本名ではないがなぜかみんなには Aさんと呼ばれる悲しい人である。

とにかく、一発キャラなので特に覚える必要はないと思われます。

「ん? なにか失礼な」とをかんがえなかつたかい?」

「ハハハ、気のせいですよ。とにかく何の御用ですか?」

「ああ、畠仕事を頼みたんだけど大丈夫かい？」

「わかりました。いつも道理の仕事で大丈夫ですか？」

「うん、よろしく頼むよ。お代はいつも道理で大丈夫だよね？」

「いや、今回はいいですよ、こつも贔屓にしてもらつてますしね。」

「わうかい？悪いね、じゃあよろしく頼むよ。」

「わうかいと△さんは帰つて行つた。

よし、わうかと決まればとつとと仕事に行くか。

「杏へ、仕事行つてくるから、留守番頼むね～」

大きな声を出して言つ。

「はーい、気をつけてね～」

2階から元気な声が聞こえた。これだけで3日は不眠不休で頑張れる気がするね。

「いってきま～す」

そう言つて家を後にした。

ちなみに杏といつのは俺の妹みたいな存在なんだけど、

まあこれについてはまた次の機会に話す」と云いつか。

……って云つて俺は誰に話す氣なんだろ? 云いつね?

第2話（前書き）

今日こんな駄作を読んでくれて、そして評価してくださる人がいる
の見て

飛び上がって喜びました。

今回も駄文ですが読んでくれると嬉しいです。

「△さん宅にて」

サクツ、サクツ、サクツ

今俺は、畑をクロド耕してゐんだがさや、

「ううう時つてなんかすがすがしい気分になるよね。

土のいい匂いの中で、健全な汗を流す、ううう時間がとても素晴らしい感じだ。

でも、ううう静かな時間のときつて昔のことを考へたりやがうね。

「回想」

俺がこの世界で初めて見たのは綺麗な空だった。

排気ガスとかないから風も気持ち良くてずっとこのまま過ごしていいたい気分だった。

30分ぐらいそのまま居たんだけビリのままじや食え死にするつて思つて行動したんだ。

適当に歩いても全然村とか見つからない時は本当に怖かった。とて

も怖かつた。

いやビビりとかじゃなくてさ、夜とかすゞく暗いんだよー、明かりなんて全然ないし、

先が全然見えないんだよ

時々犬の遠吠えとか聞こえるともう怖いとか通り越して死を覚悟したくらいだよ。

それでも、ナント力村にたどり着けたときには大きな声で

「神よ、あなたの慈悲深い行いに感謝します。」って叫んじやったし、

あの時の門番の表情はとても傷ついたね、害虫を見るような眼だったもん。

まあ、それでも優しい人なんだろうね、俺のことを村の中に入れてくれたし、

そして、そのあとに村長さんにあつて事情を説明したんだ。

もちろん転生のことは伏せておいたよ、

そんなこと言ひちゃつたら絶対に泊めてもらえないからね。

設定としては、「自分は、記憶喪失者で、自分の名前すら分からない」ということしたんだ。

そしたら村長さんが、「じゃあ、この家に泊つて行きなさい」とて
言つてくれたんですよ。

すいじゅうれしかつたね。田から若干の液体がこぼれた位だし、

部屋に案内してもらつたあとは疲れてすぐに寝ましたね。

朝に起きると身だしなみを整えるために鏡を見たんだけどあれはとても驚いたね。

だつて俺じゃない子供がうつってゐるんだもん。

「えつ? !」

たぶん生きた中で最高に驚いた瞬間だつたね。

鏡に映る俺は、髪は黒く、肌は健康的な肌色、背は165ぐりこで、
顔は、ブサイクでもなく、美少年でもなく、中の中から中の上ぐら
いの顔立ち。

年は12～15ぐらいだろう。

それが、鏡の中で俺と同じような顔をして驚いている。

腕を動かしてみても鏡の中の少年は同じよひに動く。

「ん～ん……まいいか、そこまで変な顔でもないし、こいつの
ほうがカッコいいしね」

正直なつらまつたもんはしょうがないし、

そつまえると、俺は居間にに行へりとした。

居間には、村長さんと女の子が座つていた。

女の人は、一〇歳くらいで、黒い髪のロングな可愛らしい女の子だ。
俺のことを不審がつてゐるのか村長さんから離れよつとしない。

「おはよつ、昨日はちやんと眠れたかの?」

「はい、あつがとうござります」

「はは、礼には及ばないよ。…それと少し話があるんじゃがいいか
の?」

村長さんは真剣な表情で言つてきた。

なんの話かわからないが、大切な話だところのはわかつたので俺も
真剣な顔になる。

「…………」

長い沈黙が続く、家の前には村人達が固唾をのんで見守つてゐる。

「…………」「さわさわ、さわさわ

……なんだこの空氣は?…もしや田か耳を賭けた賭博でもやつとこ
うのか?…

そんなことを考えて身構えていると村長さんが

「……わしの養子にならんかの？」

「……はい？」

予想外の問い合わせたので面をくらつてしまつたようだ。

「だから養子じゃ養子、お前さんは15かそこいらじやねりし、身寄りもないんじやろ？だからわしの養子にならんか？」

家の前の観客は冷めたよつた感じで仕事に向かつていつた。

……それにしても、何だつたんだあの連中は？

「気持ちはうれしいですがいいんですか？もしかしたら、悪人なのがも知れませんよ？」

「ハハハ、悪人がそんなこと言つぱずもないだらつ」

「まあそうかもしませんが……」

「それに君が悪人でないのは雰囲氣でわかるよ」

……雰囲氣つてそんなことわかるのか？

「それとも養子になるのがそんなにいやなのかな？」

村長さんがかからかうように囁く

「そんなことはありませんが、……この女の子は俺のこと怖がつてこるようなので……」

「ああ……杏のことが……この子は人見知りでな、時期に馴れるじやう」

杏ちゃんは困ったような視線で俺と村長さんを交互に見た。

「杏よ、彼をこの家に招きたいと思つただがいいかの？」

村長さんが優しい声で諭すように囁いた。

「…………うそ、わかった」

小さな声で肯定の言葉を口にした。

「決まりじゃな。」

村長さんは誇らしそうに胸を張つてしゃつと囁いた。

「……はい、これからよろしくお願ひしますわ。」

「そんな他人行儀な返事はやめて、やうじやな……お父さんと呼ぶがいい」

「ハハ……努力します……」

いきなりそれはハードルが高すぎると悟つたのだ。

「ああ、君には名前がないんじゃったな、では、名前をつけなければならぬ……」

「……いつと村長さんは考える素振りをみせると、

「……よし、決まつたぞ。姓はわしたちと同じ徐、名は庶だ。」

「徐庶？名前から察するに、中華系なんだろうか？」

「字は……、うむ元直がいいだろう、その字に恥じぬよう立派に人生を進むがいい」

「徐庶、字は元直、それが俺のこの世界での名前。

「真名は……自分で考えるのがいいだろう」

「真名ってなんなんだ？」

ちなみにこの後、杏ちゃんのことを呼んでしまい。真名の大切さを体に叩きこまれました。

「……ていうか、なんでなんな小さな女の子があんなに強いんだよ？！」

第2話（後書き）

ちなみにここから数話は過去の話となります。

杏との出合い、そして万屋を作ることにしたきっかけなどを書きたいと思います。

第3話（前書き）

なかなか恋姫達と絡めないので無理やり入れてみました。
そのせいでいつも駄文なのにさうに駄文になってしまいました。

読んでくれている人に感謝を

うつかり真名で呼んじやつたので血のお仕置きタイムから早二日。お仕置きでの傷も癒えてきたといいだ。

……とうよりあれはお仕置きとこうよりかは拷問に近かつたね。まず初めに、真名の大切さの講義を5時間。しかも1時間おきにビンタのプレゼントつき。

そのあとで、今の時代の講義を10時間。わざに質問に答えられないとパンチサービス。

…まあ、そのおかげで傷とともに知識がついたからいいけどね。

ちなみに、杏ちゃんの名前は徐明といつりじこ。お仕置きの後に教えてくれました。

あとわかつたことは、ざつせんの世界は三国志の世界の様だ。

徐庶の時点で気付いていたけど確信が持てたよ。

補足として、この村は陳留の北にあるひじべ、农产品は牛のお乳だそうです。とてもおいしい。

三国志といつと魏、吳、蜀の3国で中国の霸権を争つ話だったよね。

黄巾の乱から始まり、赤壁の戦い、五丈原の戦いで終わる物語。

戦争をやめるには兵がいる。その兵は一般市民からの徵兵をやめる。

……これは戦争を回避するのではなくだ。

「……まあ、なんとも物騒な世界に送られたもんだね

「へえ、何だったの？ 徐庶？」

「いや、なんでもないよ徐明」

ねつといけない、口に出してしまったよつだ。

今俺は、徐明と一緒に買い物に来てこるんだだけだ、

「今日は何を食べたい？ 徐庶？」

「うーん……焼き芋かな。」

「焼き芋って……そんなのでいいの？」

「別になんでもいいよ」

「……適当に言わないでさあ」と考へてよー。」

「……まあ」

初田に比べるとホントに話すよつになつたと思つよ。

このやつかけがあのお仕置をだと想つて受けたよかつたつて思える

から不思議だね。

「…そんな適当な返事してるとまたお説教するよ?」

「すいませんでしたー。ちゃんと勧めさせていただきます!」

それでも痛いのは嫌だから全力で考えないとね！

「あつ！ そりいえば昨日のお吸い物がおいしかったからまた作つてよ

「やつぱり！？」昨日のは自信作だつたからね」

嬉しそうに返答してくれた。どうやらこの答えは正解だったようだ。

卷之三

「…暇になつちやつたなあ～」

かといつてそしら辺をぶらぶらするわけにはいかないしなあ、

そんなことを考えながら辺りを見回してみると、

本屋で小さい女の子が高い所にある本を取ろうとして四苦八苦しているのが見えた。

この時代に文字を読める人は少ないから多分あの子は頭が良いのだ
う。

でもあの棚の本って確か…、まあいいや、助けに行きませかね。

「うーん、うーん

可愛らしく伸びをしながら頑張って取るうとしている。

「この本を取りたいのかな?..

そう言うと女の子がびっくりした顔をした後にコクンとうなずいた。

……でもこの本ってアダルト本なんだけどなんでこんな小さい子供が必要してるんだ?

ああ、あれか、兄に買つて来いつて言われたのかな?…だとしたらけしからん奴だな。

いくら恥ずかしいとはいえるこんな小さな子供に買つてしまわせるとほ、男として許せないな。

本を渡すついでに一いつ貫いつておこう

「お嬢ちゃん、こんどお兄ちゃんにこんな本を買つて来いつて言わ
れてもうんつて言つちゃダメだよ。

こういうのも大人の階段の一つだからね。恥ずかしがる暇があるの
ならまず行動しろつて言つてやるん
だ。」

「うむ、我ながら名台詞だなこれは、

「えっ？！、あっはい、わかりました。」

本を渡してあげると顔を赤くしながら代金を払いに行き、足早に店を出て行つた。

「はわわ～」とか言いながら店を出て行つた時には癒されましたね。うん。

「それにしても、

「…………なかなかに過激な内容だな。」

「これは俺も買ひべきなんだろ？」

結局、現場を徐明に見つかり、あえなく御用となりました。

第3話（後書き）

どうでしたかね…やっぱり無理やり過ぎましたかね?
ちなみにあの女の子は孔明ちゃんです。
書き方の指南書がとてもほしい。

第4話（前書き）

今回は少々長めに書いてしまいました。
しかし、今回はなかなかに自信作なので自信があります。
読んでくれる人に感謝を

サクツ、サクツ、サクツ、

突然だけある田、畠を耕していると、あることに気づいてしまった。

なんと俺には、ある能力があることがわかったのだ。

その能力の名前は……身体能力の強化だ！！

すげーくね、だつて特殊能力ですよ？、履歴書とかにもかけるかな？

それも、任意ではなく自動でかかっているらしい。

……まあ、身体能力の強化といつても微々たるものだけだね。

若干体力が多いとかそんなもんだよ。

とてもじゃないけどこの能力でオレッキー無双とかはできないね。

せいぜい生き延びるのが精いっぱいだろうね。

ん？なんでいまさらそんなことに気が付いたかだつて？

それは、畠を耕す時にはクワを使うだろ？

そんときこそ、全然疲れないんだよね。

その結果、俺には特殊能力があるんだといつ結論に至った訳ですよ。いや、だつてクワとかつて重いんですよ？ 現代人をなめないでほしいね。

そんなことを考へていろと、

「息子よ、仕事は順調かの？」

「…ああ、親父か、うん、順調だよ」

「せうか、それはよかつた。じゃあ畠が終わつたら杏と一緒に水を汲んできてくれんかの？」

「はいよー」

親父は家の中に入つて行つた。

「ふうー、さてと、じゃあ俺も行きますかね。」

まずは、徐明を探しにいかないとな。

……ああ、ちなみに親父つて村長さんのことね。まあそれは置いておいて、

確か徐明は鶏の世話をつけてたと思つただけど…………まあとつあえず歩くか、

それにしてこの村はのどかだよな、空氣もおいしいし、村の人は

みんな親切だし、

「……あれ？ 確かこのあたりだと思つたんだけどなあ」「

俺の頭の地図の中では着いたはずなのだが徐明どころか、鶏一匹み
つからない……

「…もしかして迷ったのか？」

「徐庶?、なにしてるの?」なんといふで?

「うお！？ なんだ徐明か？」

いつの間にか後ろに徐明がいたようだ。

「ああそうだ、親父と一緒に水を汲みに行けたってよ」

わが二たね
じやあ行きましょん

そばに並んで水汲み場へと向かうことにした

…それにしても何處に行こうとしたの？」

人を養ふ所だけど、それがどうかしたのか？」

「……………方向が真反対よ」

呆れたように言われてしまつた。

水汲み場は村を出て少し行つたところにあり、山のふもとにポンと井戸があるのが印象的だ。井戸も

滑車タイプではなく、ポンプ式のものなかなかにこなるものである。

ポンプを勢いよく上下させると水が出てくる仕組みになつていて。

流れ出る水を見ながら徐明が

「… そういえば、真名はもう決まつたの？」と聞いてきた。

真名… その名前を預けた人になら首を切られようとも後悔をしない
つて人に預ける大切な名前。許され
てもいなのに真名を勝手に呼んでしまつたら死罪でも可笑しくな
いらしい。

「… まだ決まつてないよ。なかなか難しいものだよね、なんといつ
かしつくじこないんだよね。」

「そう…」

「まあ、いつか決まるだろ？ からその時になつたらすぐに教えるよ

「… フフフ、楽しみに待つてるから早く決めてね」

一瞬キヨトンと顔をした後に、笑顔になつた。やつぱり綺麗な子は
笑顔が一番だよね。

しかし、この幸せは長くは続かなかった。

村の手前で俺たちが見たのは地獄だった。炎を中を逃げ惑う人々、その中には賊も交じっているのか殺

戮を行つてゐる。村を出る前の長闊さはなく、まさに呵鼻喧嘩な空間だった。

「つーーお父さんーー！」徐明が走つて行く。俺も急いで駆け付けた。

「ああ……お前たちか……」

親父は、賊にやられたのか大きな切り傷があつた。

「お父さん？！大丈夫？！」

「……わしはもう駄目じゃらうな……、だから、……お前たちは早く逃げなさい。」

「何言つてんだよー？弱音吐いてるんじゃないよーー。」

「やつだよ、はやく一緒に逃げよう。」

「…………子供達よ、わかるじやねん。この命が消えかかっているのが…………簡単なことじや、お前たちが…………ここからわしを連れ出したとしてもわしは胸の傷で死ぬじやねん。」

……なりばお前たちだけで逃げるの
が一番だと……」「

「でも……」

「……からせりといかんか……、年寄りの最後の頼みくらげ聞き
届けい……！」

強い声で親父が言つ、自分は長くないから置いて行けど……なりば
俺は息子として、

「……それが……最後の願いなんだな親父？」

「……やうじや、悪このつ、……」こんなことを強要してしまつての

死の淵でも親父はつも道理にふるまつてゐ、だつたなら俺も倣つ
のが礼儀だらう。

「……いへど徐明、親父の頼み事だ、聞いてやうないといけないだろ
う。」「でも……」

徐明は親父から離れようとしたし……田舎を涙をこじませてくる。

「……杏よ、わしはまへ……幸せに生きた……じやからむつてのじや
せじのこひからむつてのじや……」

「お前たちも若……、じやから生きなければならぬ。」

親父があやすみひにまつ

「お父さん……、うん……わかった。ありがとう。」

「親父……今までありがとな、とても楽しかったぜ。」

「ハハハハハ、そうかそうか……それは良かった。ではな……達者に暮らすが良い。」

親父から離れる。とても悲しくて、悔しい……、

丘の上で村の最後をみた、炎に包まれ全焼し、賊達は食料や財貨を片手に意気揚々と去っていく。

……すべてが燃えた……家も幸せも……親父も……すべて賊達が奪い去つて行つた。

……もつと力がほしい……大切なものを守れる力を……一度と失わないよう……

「……徐明……決まったよ、……俺の真名はさねもり護守、これからは……絶対に大切なものを護る

よ……だから受け取つて欲しいんだ。」

これは誓いの言葉……俺の人生の目標……。

「……うん……受け取るよ、私の真名は杏、これからもよろしくね、
護守」

「ああ… よりしくな、杏」

お互^いい不格好な笑い顔だつたけど、幸先としてはまあまあだと思つた。

じつして、たくさんのものを失つた代わりに真面目^{まめ}い、絶対に守りたいものが出来た。

第4話（後書き）

どうだったでしょうか？…やはり駄文でしたね。
今回は主人公の真名と決意を書いてみました。
次回は修行にてたり、万屋を開店させると思います。

第5話（前書き）

今回は陳留で拠点ゲットなお話です。

読んでくれる人に感謝を

俺たちは村を一望できる丘で今後のことをここで話し合っていた。

「それで…」これからどうあるつもりなの?」

「…とりあえず、陳留に行こう。あそこは大きい街だから仕事もあるだろ?」

「じゃあ、早く行こう…、あんまりここにいたくないし…」

急かすよ!杏が言つて…まあ無理もないけどね、

村を一望できるところでも今や、焼け跡しか残ってないし…

俺たちは村に別れを告げたあと、陳留へと向かった。

「それにしても大きい街だな」

「洛陽にも近いからね、交通の便もいいし」

「こんなだけ大きいと仕事もあそぶだな」

期待に胸を躍らせてやつと杏が、

「…そのことなんだけど、私たちのこと雇ってくれる人がいるのかな？」

「? なんで?」

「だつて私たちまだ10歳と13歳だよ?、雇ってくれないと思つんだけど…」

…すつかり忘れていた…、

…やばいな…いくら大人びてるとはいってもまだ15にも達してないんじゃ門前払いだ。

「俺は元大人の転生者なんです!」って言つても信じてもらえんだろつし、

多分病院行きだらう。今の俺に出来ることな…

「まあ、とりあえず行動してみないとわからないから早く行動しようか?」

現実逃避だけである。

「う~ん…君いくつなの?えつ?13歳?無理無理せめて17くらいいじやないと…」

失敗。

「いいけど年は?17歳?嘘言わないでくれよ。せいぜい15かそここらだろ?」

失敗。

「君たちの年齢はいくつなの?え!?13歳と10歳?!. . .すばらしい、君たち僕のところで働かない?お金ならたっぷりあるから、ハアハア. . .」

逮捕。

「どうするの護守?、働けもしないし泊る場所もないけど?」

「. . .今考へてる. . .。」

まあこな、ここまで年齢の壁が厚かったとは. . .、最後の野郎はただの口っこンだつたし、

……やつぱり俺だけでも奴のところで働いたほうがよかつたかな?

……いや、俺にはそんな趣味もないし許容すらできない!..しかし、どうするか. . .、

やつぱり今からでも奴のところに行つて. . .

「すいません、すこしいですか?」

そんな腐った考え方をしてると女の人の声が聞こえ我に返つた。

「どうかしましたか?」

杏が受け答えをする。

「えっと…大事な首飾りを無くしてしまったんですけど一緒に探し
てくれませんか？」

女の人気が心底困ったように言った。

「もちろんです、任せてくれさい。」

杏がやけ張り切って答えた。

「…杏、なんでそんなにやる気なの？」

「決まってるじゃない、大事な首飾りよ？そんなの恋人からの贈り物に違いないわ！」

「…いや…そんな理由で？」

「そんなつて何よ？！女の子には大切なことなのよーー。」

俺の肩をぐわんぐわん揺らしながら耳元で大声で言つ。

「わかつたからそんなに揺らさないでくれ！、あと耳が痛いからもうすこし離れてくれ！」

「あつ、ごめんね、それで何処で無くしたんですか？」

「えつと…多分市場だと思います。」

「市場ですか…それは一人じゃ大変ですね。早く探ししましょう。ほ
らー行くわよ護守ー！」

「わかつたから引つ張らないでくれ」

「フフ、ありがとハジゼコマサ」

「あつた！…、これじゃないでですか？！」

杏が泥だらけになりながら探し出したらしい。手には確かに綺麗な首飾りが握られていた。

「ああこれです！ありがとハジゼコマサ！」

女の人気が嬉しそうに声を上げる。

「何かお礼をしないといけませんね……、」

その時、杏の皿が光ったのを俺は見逃さなかつた。

「ええと、それじゃあ私たちは家がないので泊めてもうらえると助かるんですけど…」

「そんなことでいいんだったら是非来てください。」

「「ありがとハジゼコマサ」」

「じゅあつこてきてください」

そう言つと女の人は歩きだした。

それを確認すると杏が小さな声で、「計画通り」と言つてこたのに
は驚いたよ。

さうに晩食の時に相手がお金持ちだと聞くと俺達の身の上話を餌に
空き家をいただいた時には驚きを通り越して恐怖に変わつたね。

ちなみに悲しくないのか?と聞いてみると、「それはそれ、これは
これ」なんだそうだ。

こつして俺達は陳留での拠点を手に入れ、今回のことにも味をしめた
俺達は万屋を開店させたのだ。

第5話（後書き）

なんだかグダグダでしたね、もつとつまく書けるようになりたいです。

なんだか杏のキャラが定まらない…

第6話（前書き）

そろそろ過去編も終わりに近づいてきました。早く恋姫たちと絡ませたいです。

読んでくれる人に感謝を。

「おい、坊主、田植えを手伝つてほしいんだが」

「了解しました、料金はこちらになります」

「ほしよ、じやあつこでやしてくれ」

一晩、ちよつと仕事いつてくるなあ

「いへやしほりて」

万屋を開店して1年、俺達もこの街に馴染んできた。

万屋もそこそこの知名度になつたし、これは幸運の女神様でもついてくれたのかね？

「ふう… 終わりましたよ」

「そうか、お疲れ様」

「またの「J」利用お待ちしていますね」

じゃあ、さつさと嫁に帰りますか？

「ただいま」

「おかえり～、あと仕事が一つ来てたよ」

「仕事の内容は？」

「喧嘩の仲裁だつて」

「う～ん…面倒だけど行つてくるわ。場所は？」

「市場だつて…本当にいいの？」

「依頼されたらじょうがないでしょ？、じゃあ行つてくるわ」

「気をつけてねー」

さてと、市場に急ぐかな…

市場に来てみると人だかりができていてその真ん中で男一人が睨み合っていた。

「万屋さんですか？」

「…そうですが…依頼主さんですか？」

「はい、依頼したのは私です、このままじゃ商売にならないので…」

確かにあんなのが居たんじゃ商売にならないよな～、

「じゃあ料金せいの程度でいいですか？」

「はー… ものしほう願いしますか…」

料金ももひつたし、こいつちよやりますか…

「はーい、すこませーん、通じてへだせーーー」

人だかりを抜けると汚い言葉を吐きながらつかみ合つてゐる奴らが居た。

「ひめべーーただで済むと思ひなよーーーあーーー」

「わつちこがたがたぬかしてねーーーあーーー」

面倒くせー、とても面倒くせー。あーもつあざへくせー。とつあえず事情を聞くか…

「おーー、お前たち、なんで喧嘩なんかしてゐんだ?」

「田があつたら戦いは避けられないんだよーーー」

2人同時に答える、実は仲よしだらお前ひ……それに田があつたらつて何処の番長だよ…

「誰さんの迷惑なのでやめなさい」

「あーーーお前俺たちに説教する気かあーー上等じゃねえかーお前からやつてやるよーー」

また同時に答えてきた…ホントに仲がいいな?

一人が同時に殴りかかってくる。だが!

「「があつーー」」

一人の拳を避けて腹に一発ずつお見舞いしていく。

これでもあの事件からずっと武術の稽古をしていた俺には通用しないぜーーなにせ師匠に

「お主は防御に関しては一流じゃが、攻撃に関しては…へつぽーじやな」

つて言われたくらいだ、…へつぽー呼ばわつたされるのはホントにきつかった…。

そんな俺が攻撃の練習に明け暮れた結果なんとー

「うーむ……へつぽーの二段階上くらいの腕前かの…」にランクアップした。

まあつまり何が言いたいのかといふと、こんな野郎どもに遅れなんてどうないつてことや。

「顔洗つて出直してきなー」

決まった……文句なしに決まった…。

「「畜生……覚えてるよ……」「

一人が仲良く同じ捨て台詞を吐いて逃げていった。

観客から歓声が上がる、その中に俺……。幸せだ。

「万屋さんですね？仕事の依頼をしたいのですが……、ここではなんなので私の家にお越しください」

しばらくすると怪しげな小太りの男が寄ってきた。

気分を良くしていた俺は疑いもせずに了承してしまった。

……この時もつと注意してこの男を見ていればあんなことはならなかつただろう。

第6話（後書き）

次あたりで過去編も終わりを迎えることになるでしょうね。
それについてグダグダ過ぎてちゃんと話になっているかが不安です。

第7話（前書き）

過去編終了～！

長かった…これからは、たくさん恋姫達と絡ませていきたいと思います。

読んでくれる人に感謝を。

小太りの男の家は豪邸だった。

「すうじい家ですね…、お役人ですか？」

「はい、そうです、外で話すのもなんですからお入りください」

家中には金持ちといつよつは成金といつ單語のほうがしつづくる感じだった。

ついていき男がはいつて行つた部屋は薄暗く、悪人の巣窟といつような部屋だった。

「すいません、急用を思い出したので失礼します！」

「ここので俺も事態の危うさを感じ帰らうとしたのだが男は許さなかつた。

「外に私兵を配置させています。出て行つた瞬間に『!!』となるでしょう」

脣ぎつた顔をゆがませて歪に笑つ。イラつく顔だ……

「……依頼とはなんですか？」

「うなつたら、とつとと依頼なんて済ませてここから出てしまおつ。

「依頼の内容は……暗殺です」

「は？」

「だから暗殺ですよ、あ・ん・せ・つ」

「暗殺？なぜ？いつたいどうして俺が？！」

「私は今の位に満足していません…、ですから邪魔な人間を排除してもらいたいのです」

「なぜ俺なんですか？、」

「あなたが街で喧嘩を止めたのが眼についたからです」

「そんな理由で？！頭が緩い人なのか？」

「もちろん報酬は用意しております」

「報酬で釣るとは汚らしい…だが俺は殺人狂でもないし受ける理由がない。」

「……俺がその依頼を受ける道理がない」

「そうでしょうか？あなたは万屋ですよね？」

「…そ�うだが、依頼を受けるか受けないかは、一いち方に選択権がある」

「そうではなくて、あなたは商売の許可書を持っておりますかな？」

「？！あれがなくても商売はできるさすだ！！」

許可書といつても大半はそんなもの持つてもいないし、役人たちも見逃してきたはずだ。

なにせあれは値段が高すぎる。

「なにをおつしやつているのですか？あれが無いと駄目に決まつてゐるじゃないですか？」

そつ法律で決まつています。醜い笑い顔で続ける。

むかつく…イカつく…汚らわしい…その顔を俺に向けるな…

「どうしても嫌だというなら仕方ありません…逮捕になりますね…」

「なに？」

「私はこれでも罪人を裁く立場の人間なのですよ、刑の強弱すらも決められる…ああ、あと捕まるときにはあのお嬢さんも一緒にですよ」

「つ？！…、きさまあ！」

「いいんですか？そんな言葉を口にしても…」

「ぐう…」

「そう…それでいいのです…、依頼を受けてくれますね？」

勝ち誇ったような顔で問いかける。

殺したい……殺したい……」こつを引き裂いてやりたい……でも……

「……依頼の内容は?」

「フフフ、依頼の内容は

「

それ以上に杏を護りたい……

深夜、

標的の寝室に忍び込む……。音をたてなによつてくじと標的に近づく。

標的は最近台頭してきた若い青年で、自分の地位を脅かす危険性があるから消すらしい。

彼は皆の幸せのためにこの道を選んだらしい。

いつも街を警備しているのを見かけている。

街でも評判の良い青年で皆に好かれている。

「すう～すう～

今日も疲れてこるのでうつ… とても深く眠っこむ…

「……」めぐ

そう短く呟き… あこつから渡された短刀でのどを切り裂く…、
血が切り口から噴き出でて… 痛みで起きたのか俺の顔を娘めしそ
う睨んでいる。

「……」めぐ

同じ言葉を駄々… それでも彼は俺のことを睨んでる…、無理もな
いか……。

やがてこと切れたのかぐつたりとした…、一度と起きぬけが無く
なつた体…

罪悪感で押しつぶされそうになる…、畳にあらものをすべて吐き出
したい…

泣きわめきたい…、俺の意思じゃないと叫びたい…、でも殺したの
は俺、事実は変わらない。

「……」めぐ

三度目の謝罪…、意味のなことだと分かっているが、言わない
と潰されそうになる。

俺は重い体で急いで部屋から抜け出し、夜の闇に逃げ込んだ。

家に帰ると杏が寝ていた。俺のことを待つててくれたのだひつ……

「……ああ、護山……おかえりつて……びつしたの?」

起きたばかりの杏が声を張り上げる

「えつ? 何か変かな?」

「……わからないの?」

なにかおかしいのだろうか? 服は着替えたし、血まついてないはず
なんだが……

「あなた……泣いてるわよ……」

「あ」

触つてみると確かにほほには涙が流れていた。……こんなことにも気が付かないなんてな……

「なんでもなこと……ひよつと顎元山が」

言つ終わる前に杏が抱きしめてきた。

「馬鹿にしてるの?……なにがあつたんでしょう?話しなさいよ……」

……杏は俺を抱きしめながら心配そうに聞いてくる……

杏の体温が暖かくて……安心して……全部話しあつくなる……でも言えない。

「杏……大丈夫だよ……心配しなくていいも……」

「私つてそんなに信用ならないの?」

「えつ?」

「たつた1年ほどの仲だけど私たちは家族なのよ?それなのに護守は私を信頼しないで一人で抱え込もうとしてるーそれって信用がないってことでしょうー。」

「違うよ杏、俺はただ……」

「ただなに?心配かけたくないっていつの?」

それもある……ただ……

「怖いんだよ……」

「えつ?」

「このことを話したら杏が俺のことを軽蔑しそうで……

「……大丈夫、私は絶対にあなたのことを嫌いになんてならないわ

「なんでもんなこと……」

「せつ もも言つたけど私たちは家族なのよ、私は護守の」とを信頼してゐる。どんなことがあってもそれなりの理由があるって信じてるから……」

強い口調ではつきりと書つ、ハハ、妹に慰められるなんて兄として失格だな……

流れる涙は杏に感動したからじゃないぞ、ホントだぞ……！

「わかった……話すよ」

「せつ、じゃあ話して」

「その前に離れてくれないかな？」

「こままでずっと俺は抱きしめられたままなのである。確かに心地いいけど兄としてはね……

「ああ、じめんなさい」

そう言つて離れる……もつもつと恥ずかじがるとかそういうのはないのかねえ。

そのあと俺はすべての「」を話した、杏は俺の「」をものす「」へ

つた後に許してくれた。

罪が無くなつた訳ではないが少しだけ、体が軽くなつたような気がした。

「それでこれからどうするの?」

「俺は…あの仕事を続けたまうがいいと思つ…」

「でも…」

悲痛な声…俺だつていやだけど…

「俺はあいつの裏を知つてしまつた…だから俺は消されるかも知れない…」

俺だけでなく杏も消されるかもしれない…

「確かにそうだけど…」

「だから俺には利用価値があることを示し続けなければならぬ」

それが俺たちの生き残れる道だから…

「護守は大丈夫なの?」

「ありがとな、心配してくれて…」

そう言つて杏の頭を撫でてやる。

「なにへ、おめでたせー。」

「なんだよ、赤くやりやがつて」

なかなかに楽しいなこれ……くせになりそつだ……、そりそろやめるかな……

「……ついぶん昨日と違うじやない？」

「昨日の仕返しだよ」

抱きしめられて恥ずかしかつたからね……

朝日が昇つて俺達を照らしている。

「おい、腐れ役人、報酬をもらいに来たぞ」

そう言つて短刀を返す。

「おや…もう平氣なのですか？昨日はあの後泣きながら家に帰つたらしいですが…」

知つてやがつたのか？イラつく野郎だ

「ああ……気持ちの整理は出来た……」

「そうですか……」机の上に置かれた報酬を受け取った。「お受け取りください」

もひつたのは商売の権利書とあの時使つた短刀一本のみ…、皮肉のつもりか?

「これからはどうするのですか?」

いやらしい笑みを浮かべながら腐れ役人が問いかける。

「……お前たちに消されたらたまらないからな… 続けさせてもらひや…」

もちろん嫌な顔をするのを忘れたりはしない。

「それはよかつた… 消す手間が省けてよかつたです」

腐れ役人も楽しいのか笑つている。

……今はそつやつて優越感に浸つてゐるがいいさ……、だがな、飼い犬ですら主の手を噛むんだ。

俺は、いつか絶対に貴様の喉に噛みついてやるから待つていらーー!

（回想終了）

第7話（後書き）

護守には潜入する才能があるのです。某蛇並みに…
苦しい言い訳ですね……まあそんなものだと割り切つてもいいんと
うれしいです。

第8話（前書き）

おかしい… 恋姫たちと絡めるはずがまた遠のいてしまった。
だが次こそは絡めたいと思います。絶対に。

あと途中に電波を受信したためにおかしなところがあります。注意
してください。

読んでくれる人に感謝を

…………と世のことを考えすぎていたようだな……もひ田が落ちかけてる。

「ふう～、Aちゃん、仕事終わつたぜ～」

「だからやんじゃないと……まあいい、御苦労じゃつたな」

「またのじ利用お待ちしますね」

じゃあ早く帰りますか……

夕暮れの色に満ちた街並みを見ながら考える、

「 もひ5年か……こりこりあつたな……」

陳留に来てもう五年目、俺は18歳になり、杏は15歳になつた。

本当にいろいろあつたな……、万屋も知名度はものすじこし、

杏は陳留の庶民のアイドル的な存在になつたし、

俺自身も役人の上のほうには結構知り合いが増えた、……みんな碌でもない奴らだけど。

なんでも俺は、万屋ではなく、便利屋で通つてゐるらしい。

金さえ払えば邪魔ものを殺してくれる便利な存在。

……たくさんの人を殺してきた……良い奴も、悪い奴も……、

そのおかげでうちの家計はウハウハだけどな。HAHAHA、

「はあ～、いつまでこんなこと続けるんだろうなあ」

陳留の街も廃れてきている、当つ前だ……上の奴らは自分のことしか頭にない奴らだけ。

そんな街が発展するわけがない。まあ……ある意味俺のせいなんだけどさ。

おまけに近頃は黄巾党なるものが出始めてきた……、

黄巾党……乱世の幕開けに一役買った勢力……、導師の張角が率いる軍勢。

これから世界は戦乱に包まれる、俺はそこでどう行動すればいいのだろうか？

「まあ、なるよひになるか……」

別に俺が考えたつて世界がビリビリかかるわけじゃないし……

そう考へると俺は眼の前の肉まんに注目した。じゅるり。

「ただいま」

「あつ さねもつり 護守、えつと、その…」

杏が珍しく口淀んでいる。なにがあつたのだろうか?

「久しぶりですね、徐庶さん」

奥には腐れ役人が居た。畜生…

「……何か用ですか?」

短く、簡潔に質問する。

「決まってるじゃないですか…、仕事の話ですよ」

久しぶりのいやらしい笑み…いつまでたつても馴れないな…

「杏、部屋に入ったほうが」

「いりにいるわ」

あまり聞かせたくない話しなんだけどね…。気持ちのいい話じゃないし…。

「……それで、仕事の内容は?」

入れ替える……俺が俺じゃなくなる。スイッチを切り替える。

いつもの徐庶のスイッチと、暗殺者の徐庶のスイッチ。……ただの逃げだとはわかつてゐる。

でも、こうでもしないと押しつぶされそうになるからね。

「曹操は知っていますか?」

曹操……三国志の魏の初代君主で、治世の能臣、乱世の奸雄といった名称がつけられた。

まさに時代の風雲児と呼ばれる英雄だろう。

「……名前くらいなら……」

「そうですか……、なら話は早い。その者を始末してほしいのですが」

ぐらりと視界がゆがむ。まだ人を殺すことを馴れないようだ。

「ちょっと……大丈夫?」

顔色が悪いのだろう。杏が心配そうにのぞきこんでくる。

「ああ、大丈夫だよ」

「それで……お返事は?」

やけに答えをせかしてくる。

「…返事の前になぜ曹操を始末したいんだ？焦つているように見るのが？」

俺はこの腐れ役人が焦つたところを見たことがない。

いつも飄々と小馬鹿にして俺に命令するような奴だ。もちろん悪い意味でな。

「…」奴は時代の英雄、早く除かなければ私より上に立つ人間になるでしょう」「

だから殺さなければならぬ。と続ける。

彼の中では自分の地位がとても大切らしい。それよりも、もっと大切なものがいると思うけどな。

だが、人を見る目はそれなりにあるらしい。曹操を英雄と分かつているみたいだし。

…ここで俺が曹操を殺したらどうなるのだろうか？

歴史が変わるのが？それとも修正力みたいなものが働き失敗するのか？

…もしかしてこれが俺の送られた意味なのか？…わからないな…。

「早く答えてほしいものなんですが？」

「…………受けよう」

「ちよっと…！」の？…」

「ああ…こままで受けてきたんだから」こつだけ特別というわけにはいかない」

それもある…だが俺のなかで一番大きい感情は、興味だ。

「それに…すこし興味があるからね」

「興味つて？」

「時代の英雄様を殺せるかどうかね…」

…なんかいつになく乗り気なんだぞ」これも運命なのかね？

「受けていただけたと思っていました。今回は潜入のために従者の仕事に空きを作つておいたので」利用ください」

そう言つと腐れ役人は帰つて行つた。

あいつも必死なんだろうな、潜入の用意をしてくれるなんてさ。

外を見てみると真つ暗だ。

「もう暗くなっちゃつたし、仕事は明日になるだろ？な」

そんな呟き、それに反応したのか杏が、

「ねえ…大丈夫なの？」

「ん? なにが?」

「だから……護守の……心の……ことよ……」

心配そうに俺のことを見ている。……ああ……ホントにこつも迷惑ばかりかけてるな俺……

「いつも殺した帰りは今にも壊れそうな顔をしている。……だから、こ
れで最後にして、

これ以上やつたら護守の心が壊れちゃうわ」

ああ、俺は駄目な兄貴だな……妹を泣かせるなんてな……最低だな……

「わたしはこの街が好き……でも、この街にいるからあんな依頼が來
るのなら

わたしはこの街から出て行つてもいい……だから……」

だからやめてと、俺のために好きな街から出て行く覚悟があると言
う。

だから、俺は……

辞めない

辞める

「「」めん…俺は…それでも辞められない」

理由なんてない、ただこう答えるべきならなによつた気がした。
それだけだ。

「つーー？」の馬鹿兄貴！――――

「ぐはっ…」

杏の渾身の右ストレート、音速を超えた一撃を食らつた俺は壁に叩きつけられ、そこで意識を失つた。

DEADEND

はつ？！なんだ今の明確なイメージは？！？

だが、わかるーー！ここで辞めないを選んだら俺は確実に死ぬ…
だから「」は…

辞めない

辞める

「わかった……これが最後の仕事にするよ、約束する」

杏の眼を見て答える。その眼は涙でいっぱいだった。

「うんーちゃんと約束守つてよね

杏が涙しながら笑みを浮かべる。

それだけで俺の選択は正しかったと思えた。死にたくないしね……

そして俺達は床に就いた。

「明日が最後の暗殺任務……」

俺の部屋でさうつぶやく。暗殺に對しては名残惜しげはない。むしろ嬉しい。

だが、この街と離れるのはつらかった。

「まあ、さうでもやつてこなるよな……」

最後にさつ込んで眠ることとした。

.....それにも関わらずあのイメージはなんだつたんだ？

第8話（後書き）

どうでしたかね？あの選択肢？感想がほしいといふですね…
えつ？やつぱり駄文だった？

……精進したいと思います。

第9話（前書き）

暗殺ミッションの開始。
はたして成功するのでしょうか？

読んでくれる人に感謝を

第9話

今日は曹操の暗殺任務の口だ。成功するかはわからないがせいぜい頑張りますかね。

「じゃあこいつへむ

「氣をつかうね

そう言つて家を後にした。

「おーい、そこの、お茶を持ってきてくれ

「はーい、ただいま

今、俺は城で従者をやつてるんだけど……仕事が多い！

こんなんじや曹操なんて見つけられるわけがないじゃん！

しかもなんで俺が中年オヤジのためにお茶入れなきゃいけないんだよ？！

「おーい、お茶遅いぞー早くしろー」

「はい、急いでー」

てめえには雑巾の絞り汁入りの茶飲ませてやるよー」つじゅしづしづ。

笑い声

……待てよ、冷静になるんだ…俺は「」に何をしきたんだ?

決してイラつく上司に絞り汁入りの茶を飲ませるために来たわけじゃないはずだ…

「はい、お茶です」

「こんどから、もつと早く入れるよ、うすのう」

そういふと上司はお茶を口にした。YEU、WASHIONコンプレー
トだぜー。

「……であるからして……ある」とが……」

今、昼議をしてるんだけどこの中に曹操が居るはずなんだ。

確か…曹操って今は青年くらいの年だよな…、体格は痩せ形だったと思つんだけど…

「そんな人いないじゃん…」

この会議には城の全員が出席しているはずなんだが…。どうなつて
るんだ?

今こるのは従者を除くと、脂ぎりて太った男たちと、一際目立つ金

髪の女の子だけだ。

「ではこの案件は……曹操殿に任せるとしまして」

「おつーなんだ、曹操いるんじゃん、いやー、一時はどうなんかと思つたけどね。」

「……わかつました、その案件はこの曹操徳があざかるわ」

「なあ、あの娘つて名前なんていつの？」

「聞き間違いか？だつて曹操が女な訳がないし……うん、ありえない。絶対にありえない。」

「女の子だけだ。」

「なあ、あの娘つて名前なんていつの？」

「ん？あいやあ、曹操つていう人だよ、わざ自分で名乗つてたじやないか……」

呆れたよう言つてしまつた……

「いや……確かにわざ自分で名乗つてたけど……それは……あれだよ……なんていづか……」

「悪い……ちょっと便所行つてくるわ」

そう言つて俺は会議所から抜け出し、しばらく歩いた後、

「ウソだろ――――――――――――――――――――――

頭を抱えて叫んだ。

「あれが、曹操は実は女の子だった?……いやいや、それはないだ
ろう。だつて正史で
も男だつたはずだし……、あれが、男の娘つてやつなのか?この時代
から……?、……だが、胸もちゃんとあつたよな……?。いや、あれだつ
て寄せて上げれば何とかなるか?、……つていうか金髪つてなによ
?・どうなつちやつてんのよこれ!?……まずいな落ち着くんだ……、
まだ女だと決まった訳じやない。そうだ……本人に聞いてみよ?……」

……よし、そつと決まればそつと聞きに行くか。

……いやいや、だめだろ?それは、だつて俺はこれから殺そつ
ていう人間だぞ?!

そんな人間が男か女かなんて些細な問題を聞きに行けるわけがない!

……いや、些細な問題でもないよな?―歴史が根本から歪んじ
やうじやん!

ああー俺はどうすればいいんだよ――――――――――――

「よし、気にしない方向でこいつー。」

あれからもう時間じつくつ考えた結論がこれだ。性別なんて些細なことだ。

そろそろ準備もしないといけないし、正直考へても埒が明かないし

……

そう考へると俺は暗殺の準備を始めた。

草木も眠る丑三つ時…… そろそろ眠った頃かな……

部屋にそつと忍びこむ…… それでも女の子の部屋に忍び込んでいいのかな?

そんなくだりなーことを考へてひたすらベッドの近くにたどり着いた。

短刀をゆっくり懐から取り出し逆手に持ちかえる。

それにしても……

「意外とあつけなかつたな……」

あの曹操だと思ったのでそれなりの準備を整えたんだけどね……

まあ仕事が楽なのはいいことだからいいけどね……

そう思ふと俺は短刀を振りかぶりをして……

「武器を捨てなさい」

刃物を背中に突き立てられた……あれ？ いつの間に後ろにいたんだ？

「聞こえなかつたの？ ……武器を捨てなさい」

威圧感を込めて言つ。

抵抗しても無駄の様なのでおとなしく武器を捨てる。だつて死にたくないし……

「やつ……それでいいのよ」

「華琳様、そんな賊なんぞ早く切り捨ててしまいましょうー」

「まあ待つんだ姉者、誰に雇われたのか拷問してはつきりさせなけば……」

「一人はとても物騒なことをいい、もう一人がかなり物騒なことを言つ。」

どちらも変わらないか……それにしてもみんな女性の声だな。

いやーそんなことよりも今はこの状況を打破しなければ……」

俺の脳をフル稼働させて逃げ道を探していると後ろから、

「それで…何のためここにいるのか…説明してもいいのかしら？」

「つてそんなの見たらわかるだろ？！」

何処の世界に刃物持つて女の部屋に殺す以外の目的で侵入する馬鹿がいるんだよ！？

「……見たらわかるでしょ？…」

「ええ…あなた便利屋ね」

「…曹操様にも知られているとは…光栄の極みです」

「…殺されるのなら皮肉の一言でも吐いておいで。

「ああ…最後で失敗するなんてな……これも修正力なのか…それとも己の力量不足か…」

「わるいな杏…ミスつちました。約束守れなくてごめんな。

「やう、ありがとう、ならあなた…私のために働く気はないかしら？」

「「「なつ？！」」

「に言つてんだ？」この人は？

「しかし、華琳様？！」

「春蘭、わたしは彼と話しているのよ~。」

なんかおかしな展開になつてきただな…

「あなたのその知識、わたしの霸道の大きな手助けとなるでしょう」

…確かに俺の知識をうまく扱えば大半の人間を処分できるだらう。
上層部は真っ黒だし…。

「…しかし、いいのですか華琳様?」この男は華琳様の命を…

「秋蘭、彼は雇われないと仕事をしないのよ」

「それは存じておりますが…」

…その気持ちよくわかるよ、なんといつか煮え切らないよな。俺も
今そんな感じだし…

「それで、返事は?」

なんなんだこの展開は?殺しに来て、見つかって、仲間になれつて
誘われる?

意味がわからぬ……、普通殺されると思つただけ…

「…殺さないのですか?」

「あら?殺してほしいの?」

そう言つと背中の刃物に力を込られる。やばい、ちょっと…刺され

ちやうつってー痛つ！

……どうすればいいんだ？曹操の仲間になる？馬鹿げてる……だが……これはチャンスなんじやないか？腐れ役人どもを潰せる。それに……まだ死ねない……杏を残しては死ねない！

「わかりました」

「とこ、とつ？」

「曹操様の霸道の助けとなりましょう」

「ですがひとつ頼み」とがあるのですが……」

「聞きましたよ」

「俺には妹がいるのですが、このことを知られたら報復として始末されるかも知れません」

「そり、なら」ちりが保護しましょ。それでいいわね？」

「ありがとうございます」

……どうやら刃物をかけてくれたようだ……。後ろを向いてみると女性が3人いた。

一人目は、会議の時に見た金髪の女の子。

二人目は、黒い髪のロングでおでこのアホ毛が特徴的な女性。

三人目は、銀髪で片方だけ目が隠れている、クールという感じの女性。

「紹介するわ、彼女が夏候惇、そのとなりが夏候淵、そして私は曹操よ」

簡単な自己紹介…だが俺にはとても大変な事実が待っていた。

「え？…いきなりで悪いんだけど…みんな女の子だよね？」

スイッチを切り替える。「これからは暗殺者としてではなく徐庶として接していきたいから。

「む？…あたりまえではないか

「当然だ」

「どう見れば男にみえるわけなのかしら？」

三者二様の肯定、でもそれって…つまり…女ってことだよね…

「…信じられない…」

「…信じられないってどういう意味なのかしら？」

…やっぱり、声に出てたようだ…、曹操が殺氣を出してくる。

「いや…あのですね…曹操様？」

まず………は早く機嫌を取らなければ俺の命は…

「貴様あ！華琳様になんてこいつ」とを…

「命が惜しくないようだな…」

訂正、曹操だけではなくみんな怒つてる。

曹操が鎌を構える。…さつきの刃物つて鎌だったんだ…

…なんて悠長に考へてる暇なんてない！早く打開策を…！

「……そんなに怒るなんて氣にして…」

言い終わる前に俺の意識は曹操様によつて刈り取られた。

第9話（後書き）

絡ませてみましたがなんというか、都合がいい」とばかりですね……なんといつか……やはり駄文です。

もひとつまく書けるかになりたい。

第10話（前書き）

いえ、い役人達を粛清する話だぜ。

読んでくれる人に感謝を

今俺は、曹操様の霸道の助けとして腐れ役人たちのリストを作つて
るんだけど…、

「これは…想像以上だな…」

夏候淵様の咳き…その反応も当然だろつ…

このリスト通りにならば役人の4／3は処分できるだろつ…

「それにしても…あの便利屋がこんな男だつたとは…」

「へ.ど.う.こ.う.意味ですか？」

「噂では、便利屋はとても冷血で、己の死すら顧みず任務を遂行す
る男だそつだが…」

…どんな湾曲した噂が流れてんだよ…?発信源は誰なんだ…?

「まあ…噂なんてほとんどがでたらめですから…」

「つむ、そつだろうな…他にも天に着くよつた大男…といつ噂もあ
つたな…」

「でたらめにもほぢがりますね…」

まつたく……もつと良い噂はないのか……、殆ど出任せだつたし……。

まあ、生き残れただけでも十分に幸福か……、

俺は、曹操軍の将としてではなく、あくまで一時的な協力関係といつことになつてゐる。

この仕事が終われば俺は暗殺家業から足を洗え、なおかつこの街の平和にも繋がるだらう。

それにしても……まさか、本当に曹操様たちが女性だったとは……、

前回の一件でよくわかった。痛いほどにな。

ならこの世界は一体何なのだらうか……？、パラレルワールド？まさか正史が違うのか？

「……ん？どうした？手が止まつてゐるだ？」

長い間ぼーとしていたのだろう、夏候淵様が怪訝な顔をしている。

「……考え事ですよ……」

「そりが……なあ、やはり華琳様に仕える気はないのか？

「今はまだ……そんな気はないですね……」

「……そりが」

誰かに仕える気なんてさらさらない。将になれば戦争に駆り出され

る、死ぬ確率も増す。

兵士ならば隙をみて脱走すればいいだけだ。…ヘタレだな……。

「秋蘭、徐庶、仕事は終わったかしら?」

曹操様が部屋に入つてくるなり質問をしてくる。

「はつ、じゅうこなります」

夏候淵様がリストを手渡す。曹操様はそれを見て…

「…上出来だわ、これを早速朝議のときに提出するわ。行くわよ

「はつー！」

徹夜明けなのに元気なものだね…これも鍛錬の賜物なのかな?

「では俺は失礼して…」

「なにを言つてこらのかしら?あなたも来るのよ?」

「は?」

何を言つてゐんだこの方は?

「秋蘭、連れてきなさい」

「承知しました」

痛い！腕引っ張るなつて！取れちやうからう…待て、角は自分で、ギヤー！

会議所の前で曹操様は

「あなたはここで待機していなさい」

と言い夏候淵様と夏候惇様を伴い会議所の中に入つて行つた。

…にしても待機してるってビビりの意味だ？あれか…一番犬的な感じ？

…確かに犬と呼ばれることもあつたけどこれはひどいんじやないかな…

10分ほどすると中から、

「徐庶、入つてきなさい」

といつ声が聞こえた。

…やっぱり犬みたいな扱いなのか？ここは思い切つてワン…って言うべきなのか？

「はつ！失礼します」

そう声をかけて会議所の中に入る。ん？ワンなんて言えるわけがな

い。恥ずかしいし…

部屋の中には腐れ役人たちが俺のことを恨めしそうに見ている。

なんだこの状況は？ そう考えていると

「！」の方に見覚えのある方がいるんじゃないかしら？

曹操様の言葉に大半の役人の顔が青くなる。

「し、知らん！ そんな下賤の輩など知ってるはずがない！！」

「おいおい… 嘘はつくなよ… あんたお得意様だつたじやん…

「わしもじりんなあ～、さて廁にでも行くか…」

いやいや… 顔真っ青にしながらそんなことを言つても説得力無いでしょ…

「僕は… 僕は… バブウ～…」

君には何があつたんだ？ 幼児の真似をしたら逃げられると思つたのか？

「ならば拙者は… ブヒィー」

対抗する気なのか？！ まあ体格は確かに豚だがな…

… つていうか俺はこんな野郎共にいよいよ使われたのか？！ なんかショックだな…

「……はあ……春蘭、秋蘭」

嫌そうに曹操様が命令する……まああんな奴らと関わりたくないわな……

「「」解しました」」

そう言いうと夏候惇様と夏候淵様が役人どもを引っ張つていく。多分処刑されるのだろう……

……これでいいのだろうか?

「……」

「徐庶?…どうかしたのかしり?..」

曹操様が聞いてくる……なんていつたらいいんだろうな……

「……これでいいのかと思いまして……」

「なに?…あなたは、あの者たちを生かせとこいつのかしり?..」

少し機嫌を悪くしたようだ……声に怒氣が混じっている……

「いや……あいつらではなくて……俺のことです……」

あいつらにももちろん罪はある……しかしそれを言つならば俺も罪人なのではないか?

「……俺は……嫌々でも……たくさんの人を殺してきました。……あいつ

等が罰せられて、俺が罰せられたなにのはじりなんでしょうか?「

俺の罪……いくら懺悔しても消えない一生の重み……軽くはなつても消えない痛み……

「だから…俺も……」

「あなたはあいつ等と違つて罪を認め、その行いを悔い、精いっぱい懺悔してきた」

俺の告白は曹操様の凜とした声によつて遮られた。

「だからあなたには罰はいらないわ。もし罰がないと生きられない」というのならば、その生が罰となるわ。死の淵まで後悔し、罪を晴らすために行動する。それがあなたの罰よ」

…ハハハ、なんていつまでも罰なんだ。まさに終身刑つて奴かな…。

「さすが霸王様…罰が厳しそぎますね…」

「フフフ、その割には顔が笑つてるわよ

顔を触つてみると確かに笑つているのだ…

「まだ私に仕える気はないのかしら?」

曹操様が問いかける…俺は

「…こや、まだ俺にはふさわしくないでじゅう」

「 そう 」

答えを分かつっていたのか、落胆もせずに返答する。

「 だから… もじこ用命があれば万屋として特別価格でやらせていただきます 」

「 ええ、わかつたわ 」

… そう言つと曹操様は部屋を出て行く… 小さいながらに大きな背中…
… いつか俺もこの霸王様の霸道を支えられる人物になりたい…

「 ああ、そうね 」

ふと立ち止まると曹操様は、

「 私の真名は華琳よ。これからは華林と呼びなさい 」
「 いいんですか? 」

「 私が許すと言つたのよ? あと、その他人行儀な口調もやめなさい 」

あらり、見破られてたか…

「 それじゃあ、俺の真名は護守さねもり、よろしく頼むな… 華琳 」

「 ええ、よろしくね、護守 」

そう言つと華琳は部屋を出て行き俺一人となつた。

「……こんな三國志も悪くはないか…」

俺の呟きは誰にも聞こえなかつただろう。

このあと家に帰ると荷造りしていた杏に事情を話すのがとても大変だつた。

ちなみにあの役人の中の1名が脱走したそうだ…誰なんだろうな?

第11話（前書き）

今回は主人公の受難の日です。

読んでくれる人に感謝を

「…天の使い？」

「ああ…なんでも流れ星に乗つて現れてこの世界を平和へと導いてくれるらしそ」

ある日、仕事先で世間話として出た天の使いの話…、

「へえ～、流れ星に乗つてね…」

「そりだ！すばらしいと思わないか？」

「かかかしい…何が流れ星に乗つてだ…確実に人間じゃ無いじゃん。

それに平和と言うのも人間をせん滅したら平和になるだろ？しあれ？」

もしかして宇宙人の話なのかこれ？

「な、なあ？」

「？.どうしたんだ声震わして？」

「べつ、別にそんなことはないさ、それよりそいつは…人間なのか？」

「わあな……もしかしたら違うのかも…………」

「失礼しました——」

そして、今日の仕事終わつて——わつわつと家に帰つて——。ナツコがつづく——。

……別に怖がつてる訳じやない。断じてない——。

「ただいまー」

「おかげつづりでびつたの? わんに息切れして?」

「……なんでもない……問題もない」

やつて息を整えてると、外から何やら奥からぬ気配を感じた。

なんと叫つか…… 地震と火事と雷を同時に体験するやつな気配だ……。

「ね、今日せわつと店を……」

「徐庶は死ぬか!」

言つ終わらなつちに夏候惇様が来た。

「うむ~おお、杏ではないか、元氣か?」

「わあな~おお、杏ではないか、元氣か?」

杏と華琳たちは備の顔面を失の時に意を投合して真名を交換し合つたんだって。

…そのまま帰つてくれないかなあ、

なんて考えもむなしく夏候惇様は、

「そんなことよりもだ徐庶よ、貴様、なかなかにできるのだろう?」

… てあるにてなにをたゞへね？全然わからんないぢや

出来るとは何をですか？夏候惇様？

「決まっているだろう」

いや、なんとなくはわかるんだけど、わかりたくないんだよね……。

あれですか雀とかですかね？」

お願いだ！――」うんと呟つてくれ！――

「まーじやん? 何だそれは? 私が言つて いるのは武だ! ! 」

そんな淡い期待も木つ端みじんに破壊されてしまつた……

夏候惇様は俺の返答を待たずに引っ張っていく。

「待ってください！俺はまだ返答して……」

「杏も来るといい、一人では危ないからな」

畜生！今、ちよつと止まつたから期待しちまつたじゃんかよ！

「はい、じゃあ戻りをしきやつんで待つててください」

杏…俺は今…首掘まれてるんだけど…それについてはなんかないんですか？

しかし、杏は特に何も言わず…俺はそのまま城に引きずりられて行つた。

城の訓練所に着くと先客が居た。

「久しぶりだな、徐庶」

「久しぶりです」

夏候淵様と…

「ほんとうに、護守、息災かしら？」

「…今は息災だけどね、華琳」

華林である。

「じゃあ、早速だけ大丈夫かしり?」

「はい、華琳さま!」

そんな元気に答えないでくれ…

短刀は…本物だから使えないな、懐にしまつておこう。

俺は近くにあつた武器の山から一般的な大剣を取つた。

もちろん訓練だから刃は潰してあるみたいだ。

「こちらも準備できたよ、華琳」

「そう…じゃあ、始め!」

…生きて帰れるかな?

「でえええええい!…!」

気合いと共に振りぬかれた太刀筋…つて?あれ?!

ガキン!鉄と鉄がぶつかる音…しかし俺はそんなことよりも気にならぬことが…

「…あの…夏候惇様?それつてもしかして…真剣ですか?」

「当り前だ！－貴様、よくも華琳様の真名を汚しあつてえ！」

ブオン！！俺の首があつたところを大剣が容赦なく切り裂いてきた。

「つ？！…ちょっと…死んじゃいますつて！…」

「うるせー。なら、せつせと、死ねー！」

大剣による連撃、その一つ一つが必殺の威力がある。

その一つ一つを的確に防いでいく。じゃないと死んじゃうし……

「はあああああ！－！－！」

ドカン！――夏候惇様の一撃は地面を抉つた。

「ふう…あぶないあぶない…」

なんとか間一髪のところで逃げられた。

一貴様あ！わたしを侮辱しておるのか！さうから逃げてはつかりではないか！」

「いや……俺は攻撃するのがへつぽいなんだが……」

「知るかあー逃げてばかりではなく打ち込んでこんかあー！」

……いいぜ……なら見せてやるよ……」の……くつせんの攻撃をよお———

そう気合いを入れ俺は大剣を上段に構える。

「はああああああああああああああああ———」

俺の渾身の一撃は夏候惇様に「痛く……」「ぐはあ———」

はずもなく腹に蹴りを入れられてしまった……

痛みでうずくまつていると夏候惇様が俺の前に立ち……

「これで終わりだ……死ねえ———」

死刑宣告をしやがった。

チャキ！ 剣を構える音が聞こえる……えつ……マジ……訓練で殺されるの？！

速く武器を構えないといと……やっぱー！ 俺武器持つて無いじゃん？！
ああー武器あんなどこまで吹っ飛んでるしー……おおっ！ 本当に振り下ろしてきた。

……走馬灯が見える……初めてこの世界に来たときの「」と……杏仁ボロを
れたこと……

そして……村の最後……親父の最後……俺はあはなりたくない！ だか
ら……

「まだ死ねるかあ――――――！」

痛みを堪えて夏候惇様にタックルをする。突然の襲撃に驚いたのか
バランスを崩し、

倒れた。その隙に隠し持っていた短刀をそのまま出し夏候惇様の首に当てた。

「ナムルニド。」

華琳の声が響く：俺は夏候惇様から退き、地面に寝転んだ。

それにしても疲れた……とても疲れた……かなり疲れた……

もう一度やりたくないな…すると、近くに誰かいる気配がして、

「ふん！ なかなかやるではないか！」

「 そう言つて夏候惇様が手を差し伸べてくれる。 」 なんでこんな元気なんだ?

俺はその手を掴むと一気に引き上げられた。……これでも65キロはあるんだが…

「ええ、春蘭、護守、どちらも素晴らしい武だつたわ」

そう言つてもうたると頑張つた甲斐があつたもんだな……

「姉者もよく我慢したな…えらいぞ」

……はい？ 我慢つて？

「ああ、こ奴がうずくまつてこる時は呑を切りやうつか迷つたんだが……」

……ん？ 迷つてた？ ビリヒー！ どだ？

「ええ、春蘭、よく我慢したわね、あとで『褒美をあげるわ

……あれ？ もしかして……俺手加減されてた？

「あいつがとうござります、華琳様！」

……なんなんだよ？ 俺の存在つて？

俺は勝利したはずなのに、口からあふれ出す液体を止める「ど」が出来なかつた。

「護守もよべがんばつたね」

ああ……杏だけだよ……俺をほめてくれるのは……

「ああ、あいつがとな、杏」

「それにしても春蘭さん強かつたね

いや……俺に味方はいないようだ。

玉座の間にて…

「それにしても、護守、あなたも素晴らしい武の持ち主なのね」

「ああ、姉者が手加減していたとはいえ、なかなかに見応えのあるものだった」

「ありがとうございます」

いやへ、褒められると嬉しいね。

「でも、褒められるといつもは防御に関してだけだったわね」

「いつもですね、攻撃に関してはお粗末としか言えない出来でした」

「…それはどうも」

…なんなんだ？ここからは褒めた後、貶さないといけないのか？

「俺はなんでも防御に関してなら一流らしいんだが…攻撃はな…」

多分、曹操軍の兵士と同じくらいの実力だらう。

…別にいこや、俺は専守防衛タイプなんだよ。

「やつみたいね、春蘭、秋蘭、護守と真名の交換をしなさい」

「「まひ」「

「えつ?」

「ああ、貴公ほどの腕前のものなら別にかまわん、なあ、姉者?」

「つむ、私もかまわん」

「いや、命令されひするよつなことでもなこと黙つただけど……、

まあ、かまわないつて言つてるんだだしいいのかな?」

「では……わが真名は護守さねもりと言つます。よろしくおねがいします」

「私の真名は春蘭だ。よろしく頼む」

「私の真名は秋蘭。姉者ともどもよろしくな

「人と真名を交換する。なんだか胸が痛い……今日は気持ちよく眠れそうだな……」

「あれ？なんか胸がめちゃくちゃ痛いんだけど？あれ？骨折れてね？」

春蘭の蹴りのせいか？畜生…訓練なんだから加減してくれよ…。

……結局一睡も出来ずに朝を迎えてしまった。

第11話（後書き）

主人公は村の事件でいろいろなこと得ました。生き汚さや、家族の大切さ、そして罪の重さ。華琳達の手助けはしたいが戦争はしたくない。それがいまだ彼が曹操軍に入らない理由です。

第1-2話（前書き）

今回は親睦を深めるイベントって感じですかね
まあグダグダですけど。

読んでくれる人に感謝を

春蘭と秋蘭と真名を交換して1週間、俺の周りには2つの変化があった。

一つ目が、華林が陳留の刺史になったこと。

なんでも、腐れ役人の肅清や、黄巾賊の撃退が高く評価されたりしない。

二つ目が、黄巾賊の増大、なんでもここ最近、急速に数を伸ばしているらしい。

反乱を起こしたい気持ちはわかるけどもつと優しくはできないのかねえ～？。

…それにしても…

「暇だなあ～」

外はとても気持ちのいい天気なのに仕事が全然来ない。なんでだ？

… 最近は金の出費も激しいからここいらで稼いでおきたいんだけどなあ～。

杏は近所の子供のところに遊びに行ってるからいないし、

街を回るつても店を開けるわけにはいかないし……

「護守はいるか？」

「ん？ ああ、秋蘭さん」

珍しいな……秋蘭さんが来るなんて……、

「仕事を頼みたいのだが大丈夫か？」

「ええ！ 大丈夫です！ むしろ大歓迎ですよ！」

「せうか……それは良かつた、賃金はこの程度でいいか？」

そういつて秋蘭さんはかなりの額を差し出した。

……額が大きいといつゝとはそれだけ面倒な仕事といつゝことだ……。

つまり大変な仕事なのだ……それも曹操軍の……、

「……は断固として、絶対に逃げなければならない！」

そう決めた俺は石定の言葉を口にしようとするが……、

「まさか一度やると言つたのに辞めるなんて言わないな？」

退路を塞がれてしまつたようだ。

……仕事の交渉だけは絶対に駄目だと心に刻みつけておいた。

ରାମାଯଣରେ କଥା କଥା କଥା କଥା କଥା କଥା

今、秋蘭さんの執務室で書類仕事をしてゐるんだけどさ

「なんなんだこの量は？」

この部屋には大体1アートルほどの木籠の山が三、四出来ています。

それを見るだけでやる気なくてそのまま飛ばされてしまう

書くのも鉛筆じゃなく筆だから最早ヤバいなんて爆散してしまってるね。

「……………これも仕事だる」

秋蘭さんか来れるよ!! に言ハ

この空間で未だにやつていけているのは秋蘭さんの存在のお陰である。

やはり美人はいい：見てるだけで癒されるね…。

もし秋蘭さんが居なかつたらこんな仕事なんてほつぽり出して逃げてるだらつ。

いや、ホントにはしないよ?、だつて信用問題になるし…

それでも……、

「秋蘭さんはいつもこんな量の仕事をしてるんですか？」

「うう…… 今日は特別に多いな…… 姉者も仕事をましまつてしまつた

「いや…… 今日は特別に多いな…… 姉者も仕事をましまつてしまつた
しな……」

春蘭…… あんたはなにをやつてるんだ？ ちゃんと仕事しなきゃだめだ
うひ。

俺にも秋蘭さんにもしわ寄せが来るんだからな。

「それに華琳様も刺史になられたし、今まで以上に多くなつたな」

「それは大変ですね……」

「まあ、華琳様のためなら別に苦じやなこと」

そう答える秋蘭さんはとても輝いて見えた。

「よし、じゃあ護守はこれを姉者の部屋に持つて行ってくれ

「わかりました」

手渡された木簡を持つて部屋を後にする。

春蘭の部屋の前に着くと異様な音がする。

カーン、カーン、カーン。

「…うわ〜、なんか嫌な予感しかしないわ…」

つと言つてもこちらは仕事中なので行くしかないわけで…

コンコン、「春蘭ー、入つてもいいか?」

ノックは忘れない。紳士としても当然だし、

もし春蘭の機嫌が悪かつたら入つた瞬間に胴と首がおさらばしてゐる可能性もあるからな…。

「護守か?入つてもいいぞ」

よかつた…機嫌が悪いみたいじゃないな…

「失礼しま……それは何だ?」

部屋に入つて目にしたのは大量の木端と華林の人形だった。

「つむ?これのことか?これは華琳様の人形だ」

春蘭が胸を張つて答える。

「そんなの見ればわかるよ……なんのために作ってるんだ？」

それにも妙にリアルだな……どうやって作ったんだ？

「そんなの決まっておひつ！ 華琳様のためだ！」

「わかる訳ないだろ？ ……にしても本当にリアルだな…

…と思つて手で触れようとすると、

「貴様あ！ 人形とはいえ華琳様に触れてみろ！ その首を切り落とすぞ！」

なんて言葉が後ろから聞こえたので急いで手を引っ込めた。

後ろを向いてみると大剣を今にも振り下ろしそうな格好をした春蘭が居た。

「わかった！ わかったからその剣を下してくれ！」

必死のお願いが効いたのか春蘭は剣を下してくれた。

「それで何の用だったんだ？」

「ん？ ……ああ、忘れてた… 秋蘭さんがこれを渡して来いつだつて」

そう言つて秋蘭さんから預かっていた木簡を渡した。

「おお、わるいな護守」

「じゃあ、俺は帰るわ…」

そう言って俺は部屋を後にした。それにしてもなんだつたんだあれは？

「秋蘭さん、渡してきましたよ

「やつか、御苦労だつたな」

部屋帰つてみると秋蘭さんはお茶を飲んでいた。

「じゃあ、今日はもう終わりですか？」

書類仕事ばかりだったから体が硬くなつてしまつたようだ。

「そうだが…一杯どうだ？」

そう言って俺に席を勧めてくる。

無論いろんな良いお誘いを断る理由もないのだが、

「もういいだ

と言つて席に着く。

秋蘭さんが淹れてくれたお茶を一口飲む。とてもおこしい。

疲れた体に染み渡る感じがする。

今なら「」のね茶のために頑張れる『』あります。

「つまいか？」

「はー、とてもおこしいです」

やつまつと秋蘭さんがほほ笑む。

「それはよかつた」

それつきり会話が途絶える……ちょっとした静寂。

あれ？俺何か粗相しちゃったかな？

なんてビクビクしていると秋蘭さんが、

「……なんで護守は将にならないんだ？」

と聞いてきた。

「…………」

「答えたくないのか？」

氣を遣わせてしまったのか心配やつに聞いてくる。

「いや……そうじゃないんですが……」

話せば楽になるだろ？ 重荷を背負わせるだけではないか？

この答えは自分で探すべきじゃないのか？

などの考えが浮かぶが俺は話してしまった。

「……俺が将にならない理由は……答えがないからです」

「答え？」

「人を殺す答えがまだ見つからぬからです」

人を殺す答え……戦争に参加する理由……俺にはそれが存在しない。

迷いは刃を狂わせる。迷いを持ったまま戦場に出ても邪魔なだけだ
うひ。

それが俺の士官しない理由。

「なぜ秋蘭さんは戦うんですか？」

聞いてみたかった。他の人の戦う理由を知れば参考になるはずだから。

「私は……華琳様のためだろ？」

華林のために……その答えはとても尊いものなのだろう。

その証拠に俺には秋蘭さんはが輝いて見えるし……

俺も華林の霸道のための礎になりたいと思つてゐる。

しかし……それだけではいけないような気がするんだ。

結局は華林にすべてを擦り付けてくるような気がするから。

「……俺も華林の霸道のために戦いたいと思います。でも自分の祈りも籠めなければ不完全だと思うんです。」

多分、秋蘭さんも春蘭も自分の願いを持つてゐるのだろう。

だからこゝで一人とも俺には輝いて見えるんだと思つ。

「だから……」

「いいと思つぞ……」

「え？」

当然の肯定。

「私はその思いはいいものだと思つた。なにも考えずに戦つよりもよっぽどな……」

「…………」

「何の思いも籠めずに武を振るつのはただの蛮勇だ。そんな奴には武将なんて任せられないからな」

だからそれでいいと…悩んだ末に得たものには価値があると言つてくれた。

「ありがとうございます」

「礼には及ばんぞ…あと…敬語はやめてほしこな

「わかつた…ありがとうございます秋蘭」

「ああ、気をつけて帰れよ、護守」

最後の一 口を飲む。その味はさつきよつもおこしく感じられた。

「…………もう真つ暗だな

すいぶん遅くなってしまったようだ。空にはたくさんの星が煌めいている。

いつの日か俺もあの三人の様な願いが持てることを祈つて家路を歩いた。

第1-2話（後書き）

秋蘭の口調が全然わからなかつた。
途中別人だろうつて思いましたし…

ああ、もっとうまく書けるようになりたいです。

第1-3話（前書き）

北郷一刀君の光臨！…な話です。
ほとんど原作の使いまわしだすが…

読んでくれる人に感謝を

外はいい天気だなあ。

「護守～、お茶いる～？」

「ああ、頂戴～」

しばらくして杏がお茶を持ってきた。うん、おいしい。

「ありがとね」

「どういたしまして」

杏がほほ笑む、それだけで幸せだね。

……平和だなあ～、でも大抵こういつ平和って崩れるんだよなあ～。

……ほり外から足音が聞こえるし、……また厄介事かな…。

やがて曹操軍の兵士が来て、

「徐庶様、曹操様がお呼びですので城にお越しください」

と言つて、すぐに帰つて行つた。

…それにしてもなにがあったのかな？さつもの兵士も武装してたし…

「護守、どうするの？」

「もううん行くよ」

そう言つと俺達は城に行く準備を始めた。

「賊の討伐？」

「ええ、近くの村に賊が現れたらしいわ

現在、華林の執務室で華林と秋蘭と一緒にいる。

それにしても賊か…あまりいい思い出はないな…

「…なぜ俺が呼ばれたんだ？」

「それはだな、優秀な将が欲しいからだ」

俺は別に優秀でもなんでもないんだけどな…。

「それで、返事は？」

「うーん…まだ戦場に出るのは嫌なんだけどなー、どうすればいいんだか…。

……いや、むしろこれはチャンスなのか？

考えるだけじゃなく行動してみるのも一つの手なのかもしない
し……。

「じゃあ受け取れよ」

「さう、じゃあ早速仕事をしてもいいつかしら」

「うして初の軍団での仕事が始まる」となった。

始まつたんだけど……

「なあ、兵糧はこれくらいでいいのかい？」

「いや、少なすぎる……もつと持つてきてくれ

「おーい、槍が足りないんだが……どうなってるんだ？」

「……それは第一格納庫に入つてるから取つてきてくれ

「兵士の数が足りないんだが……何処に居るか知つてゐるか？」

「……それはあなたの管轄でしょう」

「俺の……理想を知らないか……」

「…………あなたは理想を探す前に良い医者を探すのをお勧めします」

「なんなんだ！」の仕事の量は？――さあさるだらう――

大体なんで指示されたことすらできない奴らばかりなんだよ――――

おまけに最後の奴！――めえの理想なんて知るかあ――――

はあはあはあ、疲れるな……將軍つてこんなに大変なのか――

「準備は出来たかしら？」

「ああ、華林か……もう少しつてとこかな

あいつ等がへマをしなければな――――。

「――持つてきましたよ」――

声をそろえるな気持ち悪い……、一人足りないけどまあいいや。

「準備完了だ、華林」

「そう、初めてにしては上出来ね

そうだったのか？俺はてっきり一番最後かと思つたんだが――

「……流れ星？不吉ね……」

華林が突然上を向いて呟いた。

流れ星か……こんな真昼間から珍しいな……。

あれ?なんか忘れてるよつた気がするな……なんだっけ?

「華琳様!出立の準備が整いました!」

遠くから春蘭の声が聞こえる。その声で俺は現実に引き戻された。

「……華琳様?どうかなさいましたか?」

秋蘭が華林に聞いている。

「今、流れ星が見えたのよ

流れ星……流れ星……やっぱ……なんか気になるな……。

「あまり吉兆とは思えませんね……出立を伸ばしますか?」

吉兆?うへんあと少しで思い出せそうなんだが……、

「ああー思い出したーー!」

「?ー護守?いきなりどうしたのかしら?」

おっと大声を出してしまったようだな……

「華林は知らないのか?天の御使ひつて噂を?」

「「「天の御使ひ?」」

「なんでも、天の国から流れ星に乗つて現れるらしい。そしてこの世に平和をもたらしてくれるんだってさ」

まあ、おどろ話だけどねつと語つてこの話を締める。

そして「」の話を聞いた華林は、

「くえ……面白くないやない……春蘭、出立を急ぐわよ」

「は？」

なんか乗つ気になつたみたいだ。……こんな話なんてしなきやよかつた。

「総員、騎乗！」

「無知な野党どもに奪われた貴重な遺産を取り戻すわよ……出撃……」

いつして俺の初陣が始まった。

「なあ、せつきの話は本当だつたのか？」

秋蘭が聞いてくる。

「さあ……あればそつと決まつた訳じゃないし……」

今俺達の前には青年がいるんだけどまさかあれが天の御使いなのか？

その青年は兵士を見慣れないのか怯えてこるよつだ。

「秋蘭、護守、何をしてるのかしら？」

春蘭と華林がこちらに来て聞いてくる。

「彼についての考え方をね……」

「なにか分つたことはあるかしら？」

「……特にないな」

本当は結構あるけどね、まずあの恰好は十中八九制服だろ？
よつて俺と同じ未来からの転生者なんだろ？けど……なんか違うな……。
俺の時は服もこの時代の物に変えられていたしな。

「やつ……それじゃああの者に話を聞きに行くわよ」

「しかし華琳様、危険です」

まあそれも尤もだな……罷の可能性もあるし……

「大丈夫よ春蘭、いざとなつても護守が守つてくれるわ」

華林……信用してくれるのは嬉しいんだけどこの状況で言われると……

「護守、華琳様のことを全力でお守りするんだぞ。」

「分つてゐからそんなに騒がないでくれ

「なんだとおー。」

「姉者…止めないか」

「ふふっ、じゃあ行くわよ」

やつて俺と華琳と秋蘭と春蘭は青年のところに向かつた。

「華琳様、いやつは……」

「……どうせひき違ひつけ。連中はもつと年かさの中年男だと聞いたわ

うへん、近くで見るとなかなかイケメンだな…妬ましい……、

「どうしましょ。連中の一味の可能性もありますし、引っ立てましょつか?」

「いや…その必要はないだらつ

「なぜそつ言い切れるんだ。護守?」

「賊にしては身なりが良すぎるからな…大方、何処かの貴族かなんかだらつ」

絶対に違つだらうけど。その証拠に顔が嫌がつてゐるし……。

「……逃げる様子もなによつだし……連中とは関係ないのかしら？」

「だつたらこゝは彼の保護を……」

頼もうとした矢先に、

「我々に怯えているのでしょうか。そつに決まつてありますー。」

春蘭……あんたは黙つていってくれ……話がややこしくなるから……

「……これは怯えてるんじやなくして、ビックリしてゐつてこうんだよ」

子供をあやさずよつと言つが、

「護守！貴様あーわたしを馬鹿にしてゐるのかー！」

逆効果だつたようだな……今後は気をつけよつ。

「姉者……落ち着け」

「むう～秋蘭～」

「あ、あの……」

ん？ああ、青年の声か……年は……俺と同じくらいかな？

「……何？」

華林が答える。

「君……誰?」

「おおー素晴らしいー普通は真名で呼んでしまつのにそれを避ける
とはな。

喜べ青年。もし真名で呼んじゃつたりしたら君の首は胴とお別れし
ていただろう。

「それはまじめの台詞よ。あなたこそこそ何者? 先に自分の名を名乗り
なさい」

「おつー」こまなんて答えるんだ? 僕も通つた道だからな。

「えつと……北郷一刀。日本で、聖フランチエス力学園の学生をして
る。日本人だ」

やつぱり転生者だったのか。親近感が湧くな。

それにもしても……正直に答えるんだな。……馬鹿なのか、馬鹿正直な
か迷うといつたんだな。

この反応も当然だらう……ちゃんと考えて行動しなきやだめじゃな
いか。

「…………まあ?」

「それよつ、一一こまびこなの? 日本でも、中国でもなにつて言つし

……

……ん？ なんだ？ 彼はまだ自分が転生してゐつて知らないのか？

「貴様、華琳様の質問に答へんかあ！ 生國を駕乗れと言つておるだろつが！」

春蘭……そんなに怒つて言つたら駕乗じやないか。ちやんと答へてゐるんだし。

「い、いやだから！ 日本だつて答へてゐじやないかつ！」

おおつ！ 良いぞ青年！ 春蘭に怒鳴られても答へられるなんてな。なかなかの度胸だ。

「まあまあ、春蘭も君も落ち着けつて」

「せうだぞ姉者、そう威圧しては、答へられるものも答へられんぞ」
……ひやんと答えてくるんだけどね……。

「北郷……と書つたかしら？」

「あ、ああ」

「……」

刺史も知らないのか？ おかしいな……俺はすぐに分つたんだが……

「刺史とこうのは、街の政を行つたり、街の治安を守る階級の」と
だよ」

囁み碎いて説明をしてやる。

「……警察と役所を足して一で割つたようなもんか

うへん……まあ正解かな。

「また訳の分りん」と…

呆れたよひに春蘭が言ひ。

「要するに、税金を集めたり、法律を決めたり、街の治安を乱す奴を捕まえたり処罰したりする仕事なんだろ?」

「せいかーい、なら、今の立場はわかるな?」

「……税金の未納はともかく、街の治安は乱した覚えはないんだけど

……」

「少なくとも、十分以上に堅じいわよ。春蘭。引っ立てなさい」
「そんな身構えなくてもいいだろ? まああつちから見たら俺達の方が不審者か。

「まだ連中の手掛かりもあるかもしないわ。半数は辺りを捜索。

「はつ」

残りは帰還するわよ

「春蘭、そいつは俺の馬に乗っけるから貸してくれ」

「へり縛られてるとはこえ女性と一緒に馬に乗るのはね……」

それに聞きたることもあるし……。

「やうか、それは助かる。ほり」

と言つて青年を渡してくれる。

「やうひてむなよ……物扱いしたのは謝るから」

「……それでなんのようなんだ？」

「話が早くて助かるな……頭は悪くないのかな……」

「まあ自己紹介から始めるか、俺の名は余庶だ。よろしくな

「なつー? 確か余庶って? !」

「ん?俺の名前がどうかしたのか?」

「やつぱり北郷は転生者なんだろう。じゃなきや慌てないはずだ。

「……いや、なんでもない。俺の名前は北郷一刀だ」

「ふむふむ……名前からしても日本人だろうな……服装は、制服……つまり学生か。

まあそんなことはどうでもいい。俺が気になるのは……

「北郷……君は神様を信じるかい？」

「この一点だけだ。」

「えっ？ 神様って……別に信じてないけど……」

「……………そうか」

「……多分嘘じゃないか……だとすると彼は俺とは違うプロセスで来たのか……。」

「だとすると何のために？ 僕達の意味は何なんだ？」

「……………わかんないか……。」

「二人を乗せた馬はゆっくりと陳留へと向かっていく。」

「こうして俺の初陣は幕を閉じた。」

第1-3話（後書き）

北郷君つて度胸あると思いませんか？
だつてまったく知らない人にタメ口で話せるんですから。
それに主人公とも口調がかぶりますし何らかの処置をしなければ！

第1-4話（前書き）

まことに……前書きに書くことがなくなつてきています……

何を書いたらいいのかわからなくなつてきました。

読んでくれる人に感謝を

北郷を見つけた後、俺達は北郷の身元を割り出すために尋問しているんだけど…

「なら、もう一度聞く。名前は？」

「北郷一刀」

「歳は？」

「17歳」

「俺の一回下か」。

「では北郷一刀。おぬしの生国は」

「日本」

「好きな食べ物は？」

「特にはないかな」

「うん…それはいいことだね」

「……この街に来た目的は？」

「わからない」

「特技と趣味は？」

「うーん…剣道かな」

それは珍しいな。部活なんかでやったのかな？

「……………」それでも、どうやって来た？

「前後の記憶がないから、それも分からぬ。気が付いたらあの荒野にいたんだ」

「身長と体重は？」

「… なあ、そんなこと聞いてどうするんだ？」

「ん？ いやまつたく意味なんてなによ」

なんか場の空気が悪いから和ませようと思つたんだけ…失敗だつたか？

「護守は黙つていってくれ…どうしますか華琳様？」

「埒があかないわね。春蘭」

「はつ…拷問にでもかけましょつか？」

「だから…拷問されようが、今言つた以上はわからないし、知らな

いんだつてば…」

「なあ、IJIまで必死なんだから本当なんじゃないか？」

助け舟を出しどかないと春蘭は本当にやつせつだしね…

「じひやうみたいね」

「後は、いやつの持ち物ですが…」

あるのは小銭とハンカチくらいか、…ん？小銭つて言つても400円くらいしかないぞ？

学生としてそんなもんで大丈夫なのか？

「IJIの菊の彫刻はなかなか見事なものね。あなたが作ったの？」

もし作つたとしたら捕まるけどな……。

「いや、それは百円玉…お金だし」

…まだまだ時間がかかりそうだな。

「秋蘭？彼はどうなると思ひへ？」

「ん？…さあな…華琳様の決める」とだひひ

華琳が決めることか…だつたら殺しあしなそつだな。

なにかあつても俺が引き取ればいいしな…。

そんなことを考えてこるついでに自己紹介に移ったようだ。

「私の名前は曹孟徳。それから彼女達は、夏候惇と夏候淵よ。そして彼が…」

「徐庶だ。」この街で万屋を経営してるから何かあればよろしくな

出来るだけ優しそうな雰囲気を出す。第一印象は大事だからね。

しかし北郷の反応は、

「…………は？」

疑問だった。まあ無理もないけどね。俺も同じことにして折檻されたし。

「聞こえなかつた？」

「い、いや……ちやんと聞こえたけど。ちよつと言ひちられなくつてさ」

「あれ? これまづいな……。俺へマしちまつたかもしれない……。

あ～畜生。華林がこつち見てるじゃないか……言い訳考えておかないとな。

「沈黙が辛い! 北郷! ……早くなにかしゃべるんだ! ……

「それ、通称とか、別名とか、仮名とかコスプレネームとか源氏名じゃないよね?」

いいぞ北郷！その調子で続けるんだ！その間に俺は言い訳を考えるからーー！

「何を馬鹿なことを。貴様、わたしが父母からいただいた大切な名前を愚弄するつもりか？」

春蘭が今にも切りかかりそうな声で言つ。

「い、いやいやーそんなつもりじゃないよ……でもそれは、親が三國志が大好きだからつけた訳じやないよね？」

おーーーー国志まではたゞり着けたのか。ならあと少しだな。

いやいや、そんなことよりも今は言つてない訳だ。なんて言おつかな。

別に言つてもかまわないんだけどね……、信用してない訳じゃないし

。

いや、言わないでおいて……、俺はこの世界の異分子だからな

。

もし俺が未来から来た事がばれてしまったらどんな影響があるか分からない。

もしかしたら何もないかも知れないし、

天変地異でのこの世界が滅んでしまうかも知れない。

俺だけが消えるだけかも知れないし、知つたものが全員消えるかも
しない。

そんな爆弾かも知れないものを迂闊に触れるわけないな。

そつこいつてこるつむに議論はヒートアップしたのか、

「華琳様！お下がりください！魏の王となるべきお方が、妖術使い
などといつ怪しげな輩に近づこてはなりませぬ！」

なんて言つて北郷に剣を突き立ててゐる。なんでこんなことになつ
たんだ？

「春蘭！とつあえず落ち着けつて。ほり、剣を下せつて」

「黙れ護守！華琳様このよつな輩は近づかせせぬ！」

そつ言つて春蘭は俺に剣を向けてきた。

「……なあ、俺に向けるのは間違になんじやないか？」

「知るかあ！護守、もつこいやつを底つのであれよ！」

「とつとつて剣を光らせる。この田は本当にやつを底つのであるだね。

……」こんなところで死にたくもないこゝは、

「……よしよし。じゃあ北郷のことを底つをやめよ！」

北郷なんて見捨ててしまおう。うん。それがいい。

「えつ！今の助けてくれる流れじゃなかつたの？ちょ、わかつたこと話すから剣を突き付けないでくれー！」

と言つて北郷は自分のことの考察を話し始めた。

そのあと北郷は自分の持つてゐる知識や分かつてないちょっとお頭の弱い春蘭に今の自分の状態を分かりやすく説明したり、自分が天の御使いであることにしたり、華琳の霸道の手助けとなることを約束し、あてがわれた部屋に行つた。

…それで終わればよかつたんだが…、

「それで護守、何か言い訳はあるかしら？」

俺は今、北郷が部屋に行つた後さつと逃げよつとしたところを華琳に呼び止められ、

華琳の執務室で尋問を受けているところだ。

それにもなんで北郷の時はちゃんと椅子があつたのに俺は正座なんだろうか？

「…………」

シャキン！黙っていたのが悪かったのか、華琳が笑顔で鎌を構える。

「そんな笑顔で構えないでくれよ……とも怖いじゃないか……、

「北郷一刀は私達の名前を聞いたときに信じられないと言っていたわ。確かあなたも同じことを言つていたわよね？」

「まさか本当にあの時のことを覚えているとはな……なんて記憶力だ……。」

「や、やあ……ただの偶然じゃないか？」

声が震えてるな……、ああ！これ以上力を込めると俺の首が……

「へえ～、偶然ねえ～」

華琳がどんどん力を籠めて行く……あつ？！今ちょっと首筋に痛みが

？！

「まづいぞ！……これ以上は俺の生命的まづい……！」

「！」は練りに練つた言い訳を発動する時か？！

1番 発狂した振りをして逃亡

2番 クサイ台詞を吐いて逃亡

3番 普通の言い訳

「まつ、待つんだ華琳！あのときは依頼主に男だと言われていたので焦つただけだ！！」

一時の静寂…この言い訳は苦しかったか？

だが他の言い訳なんて「ミミみたいなものだつたし…

やはり「」はクサイ台詞を吐いてトンズラの方がよかつたか？！

…だがこの場合、今は逃げ切れても後で春蘭に殺されると確実だらうな…

ならば「」や、発狂した振りをして逃亡の方がよかつたのか？！

いや…やうしたなら「」からは逃げられるだらうが、

そのあと俺はどんな顔をして華琳達に会えばいいんだ…！

絶対にシカトされるぞこれは…！最悪自殺も考えるね…！…

そんなことを考へて「」と華琳が、

「わ…護守は話になつもつなのね」

と言つて鎌を構えを解く。

しかし、華琳の口調はさつきよりも刺々しいものに變つていた。

「あの、華琳…どうし…」

「時間をとらせて悪かつたわね。下がつていいわよ」

俺の言葉を無視して華琳は仕事に取り掛かる。

その口調は初めてあつた他人の様で、温かみもなにも無かつた。

「華琳、俺は…」

「黙りなさい、仕事の邪魔よ」

「華琳…俺の…」

「つー衛兵ー」やつを追に出しなさいー

俺の話も聞かず華琳は衛兵を呼ぶ。

その声に反応した衛兵達が俺のことを掴み、城の外に投げ捨てる。

「ぐつー！」

背中を打ちつけたよつだ…肺から空気が飛び出す。

……しばらく動けなかつた。動けずに寛ぎを見ていた。

その空は綺麗な夕焼け空で、俺の心とは裏腹に何処までも透き通つていた。

「……どうすればいいんだ

俺の小さな咳きは誰にも拾われず、誰の答えも貰えないまま消えて行つた。

「……悩んでも仕方ないか…………」

そう呟くと俺は体に入れて重たい体を起こし、家へと帰つて行つた。

「…………はあー、これからどうじゅうじゅう。…………お天道様、答えておくれ

やけになつて聞いてみたが当然ながら返事は返つてこなかつた。

第1-4話（後書き）

ちなみにもし2番を選んだ場合は、

「華琳、君は本当に綺麗だね。まるで宝石のようだ。それなのにそんな怖い顔をしてしまっては台無しだ。だから華琳、君はいつまでも笑っていてくれ」

華琳はポカーンとした表情をしている。今がチャンスのようだ。
そして俺は華琳の部屋から無事に脱出することができた。

後日、「護守……貴様あ……華琳様を誑かしあって……」

「バサツ！俺は春蘭の渾身の一撃によじここの世を去った。

つていうような感じにしたいと思つてます。

第1-5話（前書き）

ここに出てくる金額は作者が適当に決めたものなので意味なんてありません。

読んでくれる人に感謝を

「…………」

華林と険悪なムードになつてから一 日が経過した。

俺が悪いのはわかるんだけど……どうすればいいんだ?

「…………」

俺の秘密を打ち明けようともなにか影響があるかもしれないし……、
かとこいつてそのまま過ごすのもなあ。

「…………はあ~」

「……ねえ、そんな空気を出すんだつたら外に出てくれない?」

杏に怒られてしまつた。まあ無理もないか…、

重い体を起しあがむとひととおりをひらめいた。

「なあ、もし杏が誰かを怒らせて、話も聞いてくれない時つてどうやつて謝る?」

そういう分からないことは他人に聞いてしまつのが一番なのだ――！

「なに？誰か怒らせたの？」

杏がにやにやしながら聞いてくる、

「ああ……ちょっと華琳とね……」

正直に答える。

「へえ～、華琳様とねえ～」

杏……なにが面白いのか解らないけど、今は真剣に悩んでるんだからな！

そんな気持ちが伝わったのか杏は真剣な顔になり、

「だったら贈り物とかしてみたら？」

「贈り物？」

贈り物か……うーん、確かに効果はあるかもしけないけど……、

「華琳様だって女の子なんだから首飾りとか腕輪を送つたら喜ぶんじやない？」

「でも、そんなもので釣るような真似してもいいのかな？」

「わあ？そこは護守の口次第じゃない？」

そんな無責任な……でも、これは試してみる価値があるな。

でも……女子子にプレゼントなんてしたことないからわからんないな……

……、

「杏、もしよかつたら着いて来てくれないか？」

「私これから仕事あるから……ごめんね」

断られてしまった……しあわせない……こは俺の感性を信じよう。

「それに他の人に聞くなんて反則よ」

見破られてたか……さすが俺の妹だな、

「じゃあ行つてくるな」

「頑張つて良いもの探すのよ」

そんな言葉を背中に浴びながら俺は市場へと駆け出した。

市場に来たのはいいんだけど……何処にそんな店があるのか分からないな……、

「こりへんは食料品売り場だしなあ。ん? おいしそうな肉まんが

あるな……。

……いや俺の使命を思い出すんだ！

俺はアクセサリを置いに来たのであつて食い物を置いに来たわけではないはずだ。

……しかしどうだ……一個くらいなら大丈夫か……。

「親父いへ、肉まんひとつよろしく」

「おお！万屋の坊主じゃねえか！久しぶりだな！」

そういうて親父は大きな肉まんをおまけしてくれた。やつたね！

残金 10000～9950（日本円にして）

「おかしいなあ、ijiでもないか……」

俺は今、焼き物の売り場にいるようだな……ijiには用もないしねつさと帰らうとするとい、

ドスッ、……ガシャーン！

なんと子供にぶつかってしまい、

その拍子に子供は持っていた焼き物を落としてしまったようだ。

「ああーお母さんに頼まれて買つてきた焼き物があー」

と書いて子供が泣き出してしまった。

周りに人だかりができる…みんな俺のことを悪人のような目で見てくる。

「お、おい泣き止むんだ坊主！焼き物なら弁償してやるからー。」

「ひく… 本当?」これ結構高かつたよ?」

あれ……この坊主、俺が弁償するって言つたら眼が光つたぞ？

これは当たり屋みたいなものなのか… そう思いこの場を立ち去るう
とするが、

うわーん！

「わかつた！わかつたから泣き止め！幾らなんだ？」

「2500へりいかな」

… 2500? ! それは法外すぎるだろう ! そんなに払つたらさすがに…

そんな心を読んだかのように坊主が、

「うわーん！」

さつきよりも大きな声で泣き出す。周囲はもう俺に飛びかかるん勢いだ……

わが二た！！！

うん… 今度から氣をつけてよね兄ちゃん」

と書いて帰って行く。
だが帰り際に、

「せいかいりふ」

と語ったのを俺は聞き逃さなかつた。……畜生。

残金 9950 } 7450

おいおいどうなつてゐんだこれは?何か?今日は厄田か何かなのか?

いつの間にか市場の反対側にたどり着いた俺が目にはしたものは、

「おい！金をだせ！！！ もなに」とこの女の命はねえぞ――！」

なんと強盗だつた。

「なあ、その娘を離してくれんか？その娘はわしの一人娘なんじゃ

…」

おじいさんの悲痛な声がする。しかし強盗は、

「そんなこと知るかあー金だ！7000は用意しやがれ！…」

「そんなには無理だーお願ひだ、その娘を…」

まあ無理だらうな7000なんて大金は…しかし俺なら…、
いやでもこれはプレゼント用なんだが…いやでも人命と引き換えるには…、

しかし7000なんて大金を赤の他人のために使うなんて…いや
でも…、

そんなことを考えてるうちに、

「助けてえー……」

「つるせえー黙りやがれ！…」

助けの声をあげる女人を男が殴る。

…なにやつてんだ俺は？…目の前の人があけを求めてるんだ。だつたら…

7000ぐらうい惜しくもなんともないだつー…

「おーー早くしないと本当に殺しちまつぜ？」

男が卑下た笑い顔を作る、

「ほら、7000だ。これで彼女を解放しろ」

7000を投げ渡す。それを拾つた男は、

「アハハハ、こんな大金を渡すなんてテメエどつかの貴族のボンボンかあ？」

と聞いてくる。

「さあな？…今そんなことが関係あるのか？」

「アハハハ、違ひねえ！」

と言つて女性を離し逃亡して行つた。

追いかけよつとすると横から、

「ありがとうございます。お陰で無事娘が帰つてきました」

「ああ、礼には及ばないだ、じゃあ俺は…」

あいつを追いかけよつとする。しかし、

「本当にありがと」

今度は人質の女性から礼を言われた。

「無事でよかったです、それじゃあ……」

今度こそ追いかけてようとするが、

次は周りを人に囲まれてしまった。

みんな口々に褒めてくれるが俺は全くうれしくない！

「ちよつと退いてくれ！あいつが逃げちゃまつ……」

しかしあんな退く気配がない。なんだこいつら？、あいつとグルなのか？

……皆が退いてくれたのはあいつを完全に見失った後だった。

残金 7450 → 450

おこおこどうなってるんだよ？やつと着いたと思つたの……、

なんで家出た時には10000あったのに今では450しかないんだよ？

自分の意思で買ったものなんて肉まんくらいだぞ？

450じゃアクセサリなんて買える訳がない……、

「はあ～、何だつていうんだよ？俺が何をしたつていうんだよ……」

俺の叫びは空しく響いた。

「ん？ おお、護守ではないか？ どうしたのだ？」

声のする方を向いてみると春蘭と秋蘭と北郷がいた。

「……ああ、春蘭か？」

「なんだ？ その残念そうな顔は？ ただでさえ残念な顔なのにどうして残念な顔になつているだ？」

「……残念、残念うるさいな……ただでさえ今日は残念な日なんだから控えてもらいたいものだ。」

それにして北郷はうらやましいな、両手に花とせ……畜生め……

「それでどうしたんだ護守？ なにか悩みでもあるのか？」

秋蘭が聞いてくる。しかしながら言ふべきはいいのだろうか……、

「……お金がないんだ」

「……は？」「……」

そりやそりだらうな……いきなりお金が無いなんて言われても困るだらうな。

「それは難儀だな……しかし私達もあまり持つていなくてな……」

「いや……借りたい訳じゃないんだけど……」

やはり最後の希望も潰えたか…なんか今日、運が悪いしこれは運命なんだろうか？

……いや、まだ諦めるには早いな…まだ田も高い。

まだ時間はある。だつたら最後まで足搔がないとなー！

運命なんて信じない！運命は自分の手で作り出すものだー！

「じゃあみんなーちょっと走ってくるわ

そうつ言って俺は再び市場に向かって走りだした。

前回もし1番の選択肢を選んでいた場合、

ちよつと鬱味なので注意してください。

この世の言語ではない言葉を吐きながら俺は鳥が羽ばたく真似をした。

華琳は啞然としているようだ。その隙に俺は華琳の部屋から脱出した。

「後日、『華琳』? おなじい?

「ひつ！近寄らないで！」

あれ? どうしたんだ?

「ああ、春蘭、おはよー！」

「黙れ獸……話しかけるな……」

……なにか間違えたのかな?

「秋蘭、おはよつ」

「…………」

シカとされてしまった…

「北郷」

「ああ？！徐庶か？！すまん俺急いでるんだーー！」

そつと駆け足で逃げて行つた…

「杏……」

「最低」

その一言をいつにかに消えていつた。

……鬱だ……死のう…

そつと俺は短刀を手に取り、

自分の首に突き刺した。

……「んな展開になると思いました……すげ鬱氣味ですね…

第1-6話（前書き）

今日は祝日なのでもうひと作品ほど投稿したいと思っています。

あと初めての三人称に挑戦してみました。

読んでくれる人に感謝を

「まあ……やうだな、あの坊主を探すか……」

「うう思ひ、再び焼き物売り場にやつて来たものの……いないな……、

「……せつぱんじに簡単にはいかないか……」

「うう咳を歸りひりかると遠くにあの坊主を見つけた。

柄の悪そつな男と仲良べ隣つてこり。

近づいて話を盗み聞くと、

「今日の利益は4000だつたよ」

「やうか、よくやつたな息子よ」

「ううじにひりは親子のよつだな。

「それにしても4000なんてすういな……一体何があつたんだ?」

「くくく、それがね、馬鹿な男がいてさ、その男に吹っ掛けたら払つてくれたんだよ」

……誇らしそうに坊主が言つ、……それにしても馬鹿な男つて俺のこ
とか？

「さうか、それは良かつたな！俺も会いたいもんだぜ……」

「よし……望みを叶えてやるうじやないか！

後ろから近づき坊主の頭と男の首根っこを掴む。

「ほり、望み通り現れてやつたぞ？」

「「「げつ？」」

「……うつと話したい」とがあるんだけ……こいよな？」

俺は笑顔で問いかける。

「「「はい」」

肯定の答えが出たのでそのまま路地裏に引っ張つて行く。

傍から見たら俺が悪者のようだが気にしない。俺には正当な権利があるのだ！

人気のない場所に着いたので親子を壁に投げ捨てる。

「「「ぐへつ？」」

「あひ……俺の言いたいことはわかるよな？」

あくまで笑顔で問いかける。内心は怒りに染まつてゐるけどな……

「いや……待つてくださいよ旦那あ、俺達にも生活つてもんが……」

「ん? 何か言つたか?」

「いえ、なんでもありません」

「どうしたんだ…俺の顔を見るなり土下座なんてして…そんなに怖い顔してるとか?」

「じゃあ…金を寄こせ!」

「はー、いひなりなります」

「そう言つて4000を渡してきた…なんか多くなつちやつたけどいいや…。いや…」

そして俺は次の獲物を探しに向かひことにした。

あれ?なんか俺悪役つぽいな…。

残金 450~4450

「さてと…次はあの強盗野郎だけだ…」

とりあえず現場に戻つて来たんだけど……やつぱりいないか……、あたりを見回しても痕跡ひとつないな……。

しうがない……こいつなつたら街を片つ端に搜索してやる。そう意氣込んでいると後ろから、

「おや？ あなたはあの時の……」

「ん？ ああ、あの時の親父さんか……娘は大丈夫だった？」

強盗に人質にされた娘の親父さんがいた。

「どうしたんですか？ こんなところで？」

「いや……犯人に逃げられてしまつたので搜索中です」

「それは災難ですね」

……ああそりだな……あんた達がいなけりや絶対に犯人を捕まえられたんだがな……、

……ここにいるとまた妨害を食らうかも知れないな……、

「じゃあ、俺は犯人を探してますんで失礼しますね」

「ああーちょっと待つてください」

足早に退散しようとする俺を親父さんが止めてくる。

「やはつ」の親父さんは強盗とグルなのか？

そう思つていると親父さんは俺に袋を手渡した。中には2000が入つていた。

「……いや、こんなのは貰えませんよ」

「いえ、あなたには娘の命を救つていただきました。それなのに何のお礼もしていませんので……」

そう言つて親父さんは去つて行つた。その背中は……とても大きく見えた。

「疑つて悪かつた……」

そう呟き俺は強盗を探すべく街に繰り出した。

残金 4450～6450

「やんやん時間切れか……」

日は落ちかけて今は夕暮れ時……店もそろそろ閉め始める頃だ。

周りには仕事終わりの一一杯に来る親父たちで、ひつた返している。

「とつあえず聞き込みから始めるか…」

情報を集めるとしたら古今東西やつぱり酒場だよね。

そう思い俺は酒場に入つて行つた。

「店主…ここら辺に卑下た面で、デブで、髭を生やしていく、いかにも小悪人つて面の奴を見なかつたか?」

「…ずいぶんとそいつのことを嫌つてるんだな…」

当り前だ、これでも言ひ足りないくらいだぞ?

「それなら…そいつじゃないのか?」

店主が指を指した先にはあの強盗がいた。

「わつだ…あいつだよ店主…」

強盗は大きな声で騒ぎ、他の客の迷惑になつてこみよがしだ。

「そうか…それならあこつをどつにかしてくれないか?正直困つてるんだ」

「あ…任せてくれ

そつ言つて強盗に近づき、胸倉をつかみ上げる。

「お盗りど、他のお客様の迷惑なので外に出でまへりますか？」

「あつ……俺は客だぞ。ちゃんと金も払つて……つてお前は……」

強盗は俺の顔を見て酔いが醒めたようだ。

「ほう……覚えていたか……なら俺の要件も分かるな？」

やつぱり強く締め上げる。

「わ、わかつてます！ お金なら返しますから許してください……！」

「ナニか……それはいい心がけだな……」

強盗を離してやる。

「これが俺の全財産であります」

「……お前……残りの40000はどうした？」

「えつ？……そんなもん俺の腹の中……痛い……痛いですよ旦那……！ 跳らないでくださいよ」

おつといけない、無意識のうちに跳びてしまっていたようだ。

蹴るのを止めてやる。ちゅうとは気分が晴れたな。

「それで……残りの40000はどうもつもりなんだ？」

「そんなものの返せる訳が…わかりました!返しますから刃物を仕舞つてください。」

やつはわれたので仕方なく刃物を仕舞つ。

「それで…どうして返すつもりなんだ?」

「やつはまた盗んで…いや働いて返します」

「わかれればいいんだよわかれば…」

そう言って刃物を仕舞つ。

「しかしお前、働き口なんてあるのか?」

あつたなら強盗なんてせずに働いてくると思つんだが…、

「はい…今はあつません」

「……ならこの店で働くといふこと

店主が話に入つてくる。

「いいのか?店主?」

「なに…なかなかに面白に奴のよつだしな…」

やつは店主が4000を渡してくる。

「いれません。」

「！」こいつの給料の前払いってやつだ

店主が気前のいい笑い顔をみせる。

「あと……これが今回の謝礼だな」

それを1000も貰えた。

「「」とにかく悪いな店主、じゃあ俺は急ぐから」

「おつーまたなー」

酒場を後にした俺は、急いで装飾品売り場に向かった。

残金 6450 → 14450

「緊張するな……」

今俺は華琳の執務室の前に来ているんだが……扉の前に立ちはだかっている。

なんといつか……あれだ、悪いことした後に校長室に行くみたいな感じ……

…落ち着くんだ…そうだ、俺は謝りに来たんだ…大丈夫、俺はやればできる子だから。

そう自分に自己暗示をかけていく。

贈り物も自分の感性を信じて選んだものだし、悪くもないと思つ。

「……よし、行こう

そう言って俺は華琳の執務室のドアを開けた。

（華琳 SHIDE）

部屋で仕事をしていると誰かが入つてくる気配がしたので顔をあげてみると、

「や、やあ華琳」

護守が入つてきたようね…なんの用なのかしら?

「なにか用かしら?」

興味もないけれど一応聞いておこうかしら。

「…やつぱりまだ怒つてゐるか…」

そう言つて護守は箱を取り出して、

「えつと、じれ…お詫びの品なんだけど…」

と言つてきた。……私を物で釣る気なのかしら。

そんな表情が出たのか護守は、

「いやーもので釣るよつな真似は良くなこと思つたんだけど…どうしても伝えたことがあつて…」

伝えたいことってなにかしら？

「「めん！俺の事は今は話せないけど何時か必ず話す！だから許して欲しいんだ！！」

そう言つて護守は頭を下げた。箱を開けてみると見事な細工の腕輪が入つていた。

腕輪は赤と青と銀の模様が入つたもので、はめてみると私の腕にきれいに収まつた。

次に護守の姿を見る。といふじる汚れていふとじふをみると粗当走り回つたみたいね。

… そんな姿を見ていふと怒つてゐるじつちが馬鹿みたいじやない。

「…はあ、顔をあげなさい護守」

「えつ？…許してくれるのか？」

「ええ、そのためには来たんじゃないの？」

「なんだそんなんに驚いてこるのかしら？」

「いや……華琳のことだから指の一本位けじめで持つて行くものかと

……」

「やつ……やつこののが好みなのかしら？」

やつ言つて絶を構える。すると護守は、

「い、いやだなあ～[冗談に決まつてゐるじやないか……」

……本当に謝る気はあるのかしら？

仕方がないので構えを解くと護守は真剣な顔になつて、

「華琳、今は俺の秘密は話せない。けどそれは華琳を信用していない訳じやなくて、話したら何が起きるかわからぬからなんだ」

「ふふつ、わかつたわ。なら話せるよ！」なつたら話しなさい

「ああ、わかつた！ またな、華琳」

そう言つて護守は部屋を出て行つた。

……それにして、

「本当に見事な品ね……」

……やっぱ感謝の言葉を書いてなかつたわね。。

そんなことを考えながら私は仕事を再開する決意とした。

（華琳SHIDE終了）

第1-6話（後書き）

三人称がすごく難しい！！全然書き方がわからなかつた！！

主人公もなんか性格変わっちゃいましたし、

こんな駄文ですが読んでくださつてありがとうございます。

第17話（前書き）

最後のほうにやつつけ感がありますが一応投稿しておきます。

読んでくれる人に感謝を

日も落ち切つた帰り道、今日のことを振り返つてみる。

「いやーなんだかんだあつたけど今日はいい日だつたな…」

途中は最悪だつたけどな…当たり屋に狙われたり、強盗と遭遇した
り、

北郷がモテモテなどひを見せ付けられたり…。

北郷が両手に花の時には殺意すら芽生えたけどな…まあよしとし
よつ。

「ただいまー」

「お帰りー、どうだつた?」

杏が楽しそうに聞いてくる。

「ああ、成功したよ。ありがとな杏ー。」

やつてやつて杏の頭をぐしゃぐしゃーあ。

「うふふと上めしよ… ーーー」

恥ずかしそうに杏が鞆の手止めてやる。

「 わうだ、 はいこれ」

そつと箱を渡す。

「 えつ？ なにこれ？」

「 いいから開けてみわつ！」

にやしながら箱を開けるように急かす。

杏が箱を開けると中には腕輪が入つていて、

その腕輪はピンクを基調とした可愛らしきものだ。

なぜか家を出た時よりも金額が多くなったので購入したものだ。

「 今日のお礼だよ……ほら、 杏が案を出してくれなかつたら華琳と仲直り出来なかつたかもしぬなかつたし……」

途中で恥ずかしくなつてそっぽを向いてしまつ。

「 ……あらがどつ！」

ぼそりと杏が呟いた言葉を俺は聞き逃さなかつた。

杏の方を見てみると、 杏は腕輪の入つた箱を大事そつに抱えている。

いや～頑張つて選んだ甲斐があつたもんだね！

だが、俺のプレゼンはまだ終わらない！

「あとで、こつも杏が家事とかしてるだろ？だから今日は俺がするな」

「えつ？……」

杏が抱えていた箱を落とす…せっかく買ったのに…気をつけてほしいものだ…。

「そんなに驚いてどうしたんだよ？」

気になつたので聞いてみる。

「い、いや…あのね…うーんと…なんていうか…」

…まあいい、なんか気になるけど料理を開始してしまおう。

そして俺は料理をするべく台所に立つた。

～杏のIDE～

～ひつよひ…護守が料理を始めちゃつた…。

前回の料理は料理なんて言えるものじゃなかつたけど……、覚えて

ないの？

でも……あんなに自信がありそつに作ってるんだから大丈夫よね？

「まずは……そだなお吸い物を作るか……」

お吸い物か……それなら簡単だし食べられないものにはならなそうね。

「とりあえず……水の中に鶏をぶち込むか……」

待つて！鶏を生のまま入れたら血の味しかしないものになっちゃうつて……！

まずい……始めるからともまずい……！」は早く変わつて貰わないと……

「護守？気持ちは嬉しいけど……大丈夫だから変わつて？」

最後の望みをかけて聞いてみる。しかし、

「ん？大丈夫だ杏。めちゃくちゃうまい物食わせてやるから待つてくれ」

……その自信は何処から出でてくるんだらう？

……しきりがないので大人しく料理の出来る様を見守ることにする。

「あとは……とりあえず野菜を入れておへか……」

護守は見たことのある野菜から見たことのない野菜まで適当に入れていいく。

…つて待つて！今雑草を入れたよね！なんで雑草なんていれるのよ？！

「よしーーー」これは火にかけて放つておこう

…なにが、よしーなんだろう？確実に、駄目ーーだと思つんだけど…、

「次は…買つてきた豚肉と牛肉を使つか…」

豚肉と牛肉？！なんでそんな高級な物買つて来ちゃつたの？もつたいない…、

「うーん…面倒だな…塩まぶして焼くだけにするか…」

ああ…あれがこの料理のなかで一番まともかもしねー…。

「火力は…もちろん最高だな…中華は火力だつて言つし…」

訂正…あんなものただの消し炭ね。料理なんかじやないわ。

「ああー忘れてたーーお吸い物の中にこれを入れないと…」

そう言つて護守は見知らぬ粉を入れようとしている。

「ちょっと待つてーそれは何？！」

そんな怪しいものの料理…じゃないけれど入れさせる訳にはいかない！

「ん？これが？これは怪しい商人から買つた料理がおいしくなる粉

だ

料理がおいしくなる粉？なんなのそれは？

つていうか怪しい商人から買つたつて…絶対に危ないものでじょつ
！？

「そんなの入れて大丈夫なの？！」

もうすでに黙黙黙黙な状態だけどね…、

「平気だつて、なんか効能もいいみたいだし…」

そう言つて護守はお吸い物？のなかに粉を入れる。

するとお吸い物が紫色に変色した……紫？

「…………護守？これどうするの？」

私達は鍋の中の物体を凝視している。

「……大丈夫だろ……食つてみたら意外とつまいましれないし…」

「……冷や汗を垂らしながら言つてお詫びじゃないと思つたが…、

「…………それで、早くよそつちまおつ」

いつして護守作の晩御飯が完成した。

～杏のIDE終了～

どうしてこいつになっちゃったんだ？

今田の晩御飯は俺が腕によりをかけて作ったはずなのに…、
まず一品田がローストビーフを意識した肉料理のはずが…こんなのが
ただの消し炭だ。

一品田はそちらへんで拾つた雑草を盛り付けただけの簡単料理…こ
れが一番マシに見える。

二品田はスープのはずが…なんなんだこれは？こんなのただの紫
色の物体だ。

自分で作つて驚きの逝品達だ。

食卓はこつもの騒がしい感じではなくお通夜のような感じになつ
てゐる…。

杏も俺も食卓の上にある物体に釘付けになつてゐるよつだ…もやつ
ん悪い意味で…。

「…………ねえ…本当にどうするの？」

その声は村を焼き払われた時よりも沈んだ感じだ。

「…た、食べてみないと分からなイだろ…」

そつ言つて俺は紫色の物体を口に近づけた。

あ…やばい…臭いだけでぶつ倒れそうだ…。

なんていうか…血の臭いと牛乳の腐った臭いと納豆の臭いと鶏の臭いと正体不明の臭いがする。

多分この正体不明の臭いが例の粉だらうな…。

その殺人臭を我慢して紫の物体を口の中に入れてみた…。

そこで俺の意識は途絶えた。

（杏SIDE）

「ちよつと護守…大丈夫?…」

護守は紫色の物体を口にした瞬間にビクンと痙攣し、そのまま床に倒れてしまった。

慌てて護守のそばに行き脈を測る…“ひつやう生きてはこないみつだ…よかつた…。

「だから料理なんてしないでつて言つたのに…」

前回も同じような田てあったんだから覚えておいでよね！

……ああー護守の顔色が紫色……速くー速く医者に連れて行かない
とーー！

護守を背中に抱いてお城を田指す。

「…………お」

護守がついわ言のよつに何かを呟いた。

「どうしたの護守？」

止まつて唇きに耳をすませると、

「やめんなよ……親父……俺に近づくな……その紫色の物体を捨てるんだ
あ……」

なんて言葉を呟いていた。

「まあーーー速く医者に診せなことーーー！」

やつ言つて私は全速力でお城へと向かった。

～杏S-HD E終～

やめるんだ親父、俺を引っ張つて行つてどうするつもりなんだ？

えっ？ 川を渡るだけ？ ふざけるな！ 俺はまだ死にたくない！！

……ああ！親父！！その紫色の物体を何処から取り出したんだ！！！

やめろ…近寄るな…！何笑つてんだよ親父い…！

待て……落ち着くんだ親父！！そんなことしたて何にもならないそ

やめてくれ……その紫色の物体だけは……

はつ？！なんだつたんだ今夢は？！妙にリアルだつたんだが……

……本当に夢だったのか…………いやいや、夢に決まってるだろう!!

そりゃなきゃ親父と会えるわけかな……ん? 腕に何か書いてあるな……

なになに……いつでも待ってるわ……そんな黒鹿な

目を擦つてもう一度見てみるとそんな文字は何処にも書いていなかつた。

「護守！もう大丈夫なの？！」

「うひやあ……」

華琳？！……驚かせないでくれよ……危うく親父の所に行くといひだつたぞ……。

華琳の後に春蘭と秋蘭と杏と北郷と医者がいた……医者？

「ああ、……それでなんで俺はここにいるんだ？」

「えつ？！……覚えてないの？！」

「うひしたんだ杏っ、そんなに驚いて……、

「杏が城に来てな、護守のことを診て欲しい」と言われて急いで医者に診せたといひ……」

診せたといひうひなつたんだ秋蘭？大事なといひで話を切らないでくれ。

「なんでも毒物を摂取した疑いがあるといひよ。……なにか心当たりはあるかしら？」

毒物？！……心当たりなんてないな……確かあの晩は……うひしたんだつけ？

「ねえ護守？本当に覚えてないの？」

「ああ……うひぱりだ」

「…………はあ～」

……なぜか杏にため息をつかせてしまった。なんでなんだ？

「それで医者に診せた後にこの部屋で二日間看病してやつたという訳だ」

春蘭が胸を張つて答える。……二日間？

「なあ……俺つて二日間も寝たきりだつたのか？」

「ええ、うわ言で親父がどうとか、紫色の物体が、とか何とかいろいろ弦いてたわよ」

華琳が俺の質問に答えてくれた。それにしても二日間も寝たきりだつたとは……

……ん？……紫の物体？……なにか思い出せそうだな……あと少しなんだが……。

「もつ大丈夫なのか？尋常じゃなくくらい顔が紫色だつたぞ？」

北郷が心配そうに聞いてくる。

「ああ、もつ大丈夫だ」

笑いながら答える。

「そうか……」

北郷が胸を撫で下ろす。……いい奴だな。

…あと少しで思い出せそうなんだが…何か情報はないのか?

「毒の種類はまだ特定されていませんがおそらくかなり強力な毒で
しょう」

強力な毒か…よく生き残れたな。ん?杏はなんでそんなに残念そ
な顔をしているんだ?

「……ああ…思い出した…！」

そうだ!確か俺が料理を作ったら紫色の物体が出来ちゃってそれを
食べたら…、

……すごく恥ずかしいな…自分の料理で死ぬなんてことにならなく
てよかつた。

「それで犯人は誰なの?！」

ああ華琳…必死になつてくれるのは嬉しいんだけど…、

…「」の場合はそつとしておいて欲しいかな。

杏に目で助けを求めてみたが目を逸らされてしまった。

「えつと…犯人は…」

「…「犯人は?」」

…そんなに期待しないでくれよ…すごく言い辛いじゃないか。

「……俺の料理だ」

「「「「…………はあ？」」「」」

そりやそつなるよな、俺だつて同じ反応するし、

杏！助けてくれ！！

今度は通じたのか杏が助けを出してくれた。

「えつと…護守の料理は料理と言えないもので…そこに未知の粉を入れたせいだと思います」

「…つまりその未知の粉が毒物だつたのかしら？」

「…だ…そつ…う可能性もあるじやないか…！…ナイスだ華琳！」

「いえ、それはあり得ません」

「なぜそういう言い切れるんだ？」

尤もな意見だな… さすが秋蘭だ。

「さつさ野良犬にあげてみましたが特に変化はありませんでした」

…動物実験とは… 未恐ろしい妹だ…。

「つまり、…どうこういことだ？」

「つまり未知の粉には何の毒性もなく、護守の料理がいけなかつたことだよ」

「秋蘭……そんなバツサリ言わなくてもいいじゃないか……」

「杏、そんなにひどいものなののかしら?」

「…………はい」

杏……ちよつと位底つてくれてもいいだろ?」。

「そう……心配して損したわね……行くわよ」

「「はい」「わかった」

そつ言つて華琳達は去つて行つた。

「じゃあ私も帰るから」

杏も帰つてしまつた。

「では、僕も仕事がありますので」

医者すらも帰つてしまつた。

「…………絶対に料理をつまくなつてやる」

俺は決意を秘めて再び眠りについた。

第1-8話（前書き）

投稿が遅くなってしまい申し訳ありませんでした。

学校が始まってしまい、小説を書く時間が取れなくなってしまいま
した。

できるだけ努力するつもりですが、

前のようなスピードでは行けないと私はいます。

読んでくれる人に感謝を

夢を見た。

俺の住んでいた村が焼き払われ村人達が逃げ惑つ。

その中心で俺はその光景を見ていることしかできずにはいる。

助けるために触れようと/or/その腕はすり抜けて行く。

しばりくすると親父が賊に切り殺される。

親父は倒れた後に俺のことを恨めしそうに睨む。

その視線に耐えきれずに目を背けると辺りは炎に包まれておらず、

真つ暗な闇の中で俺が殺した人たちが睨んでいる。

四方八方を囲まれ俺はその視線に耐えきれなくなり懐の短刀に手にかける。

そして……、

「……もう朝か……」

そう言つて体を起します。

それにしても……久しぶりにあの夢を見たな……。

最後に見たのは2年位前だったかな……、

もつ昔の話だつていうのにまだ吹つ切れてないのか……、

まあ華琳達と出合つまでは暗殺業をやつてたからそんな昔つて訳でもないけど……、

「……やつぱり、この短刀のせいなのかな……」

そう言つて懐にある短刀を取り出す。

確かに持つていて気持ちのいいものじゃないけど……結構付き合つてが長いんだよな。

この短刀つて結構いい品物だし愛着もあるんだよな……怨念とか籠つてそうだけど……。

「……まあ、これも一種の戒めだよな」

そう言つて俺は懐に短刀を戻し、自分の体の調子を確かめる。

……よし、胃の調子もいいし、吐き気もしないし、手足の痺れも取れてるな。

三田も寝たから氣だるいが、後遺症もなによつだしあつ帰つても大丈夫だろ？。

そう結論付けてベットから立ち上がる。

「やつだ… 華琳達にお礼を言いに行かないとな」

そんなことを呟きながら俺は華琳達を探すべく城を探索する」とこした。

「…あれ？俺つてこんなに方向音痴だったのか？」

華林の執務室に向かつていたはずなのに気付いたら中庭に来ていた。

…前から思つてたけどまさかここまでとは… 引き返すか…。

そつ思つてみると中庭の方からものすごい風切音が聞こえた。

気になつて覗いてみると春蘭が一心不乱に鍛錬をしていた。

…邪魔するのは悪いし退散するところが。 ここにいると面倒事に巻き込まれそつだし。

…いや、せつかく見つけたんだしこはお礼を言いに行つた方がいいんじゃないかな？

いくら春蘭だといってもそんな簡単に危険な目に遭つ訳がない……
…と思つ。

それに春蘭だつていきなり攻撃して来ないつて俺は信じてるし……

……多分だけど。

……いやいや、別に殺しに行くつて訳でもないんだし大丈夫だらう。

……でもなんとなく嫌な氣がするんだよな、しかしお礼は言わないと
いけないし……

……なんでお礼を言いに行くだけなのにこんなに悩まきやいけない
いんだ？

別に悪いことしたから謝るつて訳でもないのにすぐ行く氣が起き
ないんだけど……。

……しようがない、行くか。すぐ嫌な氣がするけど……。

「おーい、しゅんら」

「ひーー何者だーーー」

俺の言葉も言い終わらないうちに春蘭の怒声が響き、

同時にものすごい速さ大剣を振るつてきた。

その大剣は俺の顎先を少し切り裂いていった。

……もう少し下だつたら喉を切られていたな……危なかつた。

まあこれでも十分に危ないけど想定した怪我の一割程度で済んだな。

最悪死ぬ可能性も考えてたし……。本当に死ななくてよかったです。

それにもやつぱり春蘭は春蘭だったな……。

「ん？ 護守ではないか、もう体は大丈夫なのか？」

……たつた今剣を振るつた相手とは思えない口ぶりだな……まあ春蘭だしいいや。

「ああ、おかげをまですかり治つたよ。」

「やうか、それはなによつだ」

ちゅうとだけ安心したよつな声で囁いてくれた。

その言葉で俺自身も幸せな気持ちになつた。

でも春蘭のせいで怪我増えたんだよな、……なんか一気に幸せが逃げた気がする。

……まあ看病してくれたのは本当なんだしさ。なんとかお礼しなきやな。

「それでお礼を言つに来たんだ」

「お礼？」

「俺が倒れている時に看病してくれたんだろ？だからありがとな

素直にお礼を言つ。すると春蘭は、

「よ、よせ、なんだか照れるではないか」

なんていって顔を赤くしている。

……しかし驚いたな。まさか春蘭が顔を赤くすることがあるとは……。

ただの猪武者だと思つてたんだが……人は見かけによらないってことかな。

「ん? 護守、なにか変なことを考えなかつたか?」

「えつー? 別に考えてないけど」

……まさか考へてることまで分かることは。さすが春蘭だな……。

……なんかこのままいじつこると鍛錬に付き合わせれそつだし……早く逃げるか。

「じゃあ俺は他の人にもお礼を言いに行かないといけないから。鍛錬頑張つてな」

そいつ言つて俺は足早に中庭を後にする。

後ろから声が聞こえるが氣のせいだと信じて行くとしよう。

さて……次は何処に行こうかな……。

「…………」リリは秋蘭の執務室か……

……おかしいな、確かに俺は華林の執務室を指していたはずなんだが……。

やつぱり途中で食堂に入ったのがまずかったのかな？

あそこで方向がじけじけになっちゃ……今度から気を付けることにしておこう。

……それでまあのシユウマイはとてもうまかったな。また食べたいいものだ。

「秋蘭」、いるか～？

無断で部屋に入つて怒りを買ひ、矢で射られたくないから声をかけておく。

「ん？……護守か、少し待つていてくれるか

部屋の中から返事が聞こえたのでしづらしく待つこととした。

……そういえば俺が倒れた原因ってなんだつたんだろうな？

確かにあれは料理なんて言える代物じゃなかったのは確かだけど、

それでもスープが紫になるなんておかしいこと思つんだよね。

しかも前の世界では一人暮らしだったから料理も出来ていたし、

でも杏はあの粉にはなんの毒性もないって動物検査してくれたしな

……。

「ヒーヒーとはやつぱり俺の料理せいが……」ふざ杏に料理を教えてもらおうかな。

……………それにしても遅いな……もう一〇分ぐらい待つてる
んだが……。

何かあつたのかと思い部屋の中に入ろうとするが、

「悪かつた護守、待たせたな」

と言つて部屋の中から出てきた。それは良かったんだが……、

「……秋蘭もしかして風呂上がり?」

「ああそつだが……なにか問題でもあるのか?」

…………問題? そんなのたくさんあると思ひけどな。

まづその姿、ちょっと頬が赤く染まつていて色っぽいし、いい匂い
もある。

そして男に見せる! とを危険と思わない精神。これが一番の問題だ。

俺のことを信頼しているって意味なのかも知れないけど……。

俺も男なんだからさ……もつちよつと警戒しないと危ないと思つんだよね。

……「こんなことだつたらわつと部屋の中に入ればよかつたかな……。

そんなことを考へてゐると秋蘭が、

「……護守、そんなことを考へない方が身のためだぞ」

なんて言葉をいつものクールな表情で言つてきた。

その言葉を聞いた俺は思わず、

「すいませんでした！」

と綺麗なお辞儀をしてしまつた。

……それにしてもなんでバレたんだ？顔に出ちゃつたのか？

まさか本当に考へが読めるなんてことはないだろ？……

いやでも秋蘭なら……さつきも春蘭に考へを読まれたし……。

考へてる時間が長かつたのか秋蘭が心配そうな声で、

「それでもう体は大丈夫なのか？」

と聞いてきた。俺は頭をあげて、

「ああ、もう大丈夫だよ」

と言つと秋蘭は安心したようこ、

「もうか、それは良かつた」

と言つてくれた。

その言葉が嬉しくて自然に感謝の言葉を口にした。

「だからお礼を言いに来たんだ。看病してくれてありがとう秋蘭」

「別にかまわないさ、私達は仲間だからな」

秋蘭がほほ笑みながら言つ。

仲間か、そんな風に呼ばれるとなんだか嬉しいものだな。

でも……俺にはそう呼ばれる資格なんてないだろうな……。

罪の重さに潰されそうな俺。戦つ理由の無い俺。人を殺すことを拒絶している俺。

こんな俺では到底華琳の手助けなんて出来やしないだりつ。

でも華琳達の手助けをしたいのも本当で、

この世界のみんなの平和のために戦いたいと本気で思つてる。

それでも戦うのが怖くて……人を殺すのが恐ろしくて……、

そんな考えが頭の中をぐるぐると回り続け気持ちが悪くなる。

「……はあ、護守」

黙つている俺を見かねたように秋蘭がため息を吐き、言葉を続ける。

「確かに考えるのは良いことだけは思うが、考えすぎるのはどうかと思つぞ」

……確かに最近は妙に深く考えることが多いな……。

「そんなに考へても答えが出ないのであれば、行動してみるのも一つの手だと思つぞ」

行動か……それも尤もだな。悩んでばかりなのは気分が悪くなるし、少し荒治療氣味だと思つけど行動することによって何らかの答えを得られると思うし。

そう思つとなんだか気持ちが良くなつた気がするな。……結構俺つて単純なのかな？

……せついえば前にも悩みを軽くして貰つたな……迷惑かけてばつかりだな。

「ううだな……ありがとう秋蘭、気分が良くなつたよ。今度ちゃんとお礼するな」

「ああ、楽しみにしているよ」

そう言い俺は次の場所に向かって歩き出した。

「うへん、気持ちいいなあ」

大きく息を吸いながら体を伸ばす。

城の2階のベランダのような場所から空を見上げると太陽は真上に位置していた。

風は心地よく、気温もちょうどよく絶好の行楽日和と言える陽気だ。

街を見てみると桜の花が咲いていて多くの人が花見を興じているようだ。

その様子は活気に満ちていてこの街の強さを見ているようだ。

「もう春か、時間が経つのは早いな

なんて年寄りみたいな言葉を軽く笑いながら呟く。

下を見てみると中庭で春蘭と秋蘭が兵士たちを調練している。

みんなこの街を護るために必死に訓練している。

「みんな頑張ってるなあ～」

……だけど春蘭、ちょっとは手加減してあげないと兵士が死んじゃうと思うぞ?

もう兵士さんみんな怖がってるよ……俺が巻き込まれなくて良かった……。

あんな訓練に参加したら敵と戦う前に味方に殺されるかも知れないし……、

もしさうなつたら死んでも死にきれないだろ?な……。

……それにしても、

「なんで俺ここにいるんだ奴?」

俺は正面に華琳の所に行こうとしてたのに、なんでこんな所に出てきちゃったんだ?

いつもはちゃんとたどり着けたはずなんだが……まあいつか会えるはずだしいいが。

そつ思い俺は昼の陽気を一通り満喫したあと、次の感謝の相手を探すことにした。

第1-8話（後書き）

最後は思っていた構想とまったく違うものになってしまいました。

頭で考えているものを文章にするのってすごく難しいと改めて実感しました。

おかげでまた最後がやつつけ仕事になりました。

これからも精進していきたい所存です。

第1-9話（前書き）

久しぶりの投稿ですね……

今回は結構長めになつてしましました。

読んでくれる人に感謝を、

「はあ～… もづこやだ」

もづこ回の厨房だと思つてゐるんだよ… 3回目なんだぞ… もぐもぐ。

このままじや一生たどり着けないよつたな氣がしてきたな… もぐもぐ。
… もぐもぐ。

まつたく… そんな呪いとか幽霊なんてものがあつて堪るか…

そんなものは信じません… 絶対に信じません… !

最近、突然右肩が重くなつたり、真夜中に足音が聞こえたりする
ど信じない。

ああ… 背中が寒くなつてきた… この話題は考へるのやめようかな。

それにもしてもこの焼売は絶品だな。さすがに魏の料理人の腕は違つ
な… もぐもぐ。

これを食べると自分が方向音痴だつて事も忘れられそうだな。…

もぐもぐ。

「… それでもままならないものだな…」

「なに格好付けて言つてゐんですか…」

俺が小さく呟くと後ろから呆れたような声が聞こえた。

その声の方に振り向くと、

「ああ――――なんで焼売こんなに食べちゃつてゐんですか――――！」

なんて大きな声で叫びだした。

「…あれ、もしかして拙い」とした?

「…前ですよー」これは曹操様達の料理なんですよー…

…えつ華琳達の?…なにかの[冗談だろ]…もし本当なら俺、殺されるんじやね?

「……マジで?」

「マジですよー」

…拙いな。とても拙い…」これが華琳達に知られたら…首が飛んでいくな。

さすがに首は飛ばないか…多分ボコボコにされて終わるだらうな…
それも嫌だけビ。

「どうするんですか徐庶さん…」のままじゃ私も仕事クビになるかもじやないですか!」

そつと泣いて泣きそづな顔で俺の肩を揺らしてくる。

確かに俺が全面的に悪いと思つてるとんだけど……この速さは拙い……早く止めさせないと……。

「とつあえず落ち着いてくれ……「つふ」

「落ち着ける訳ないじゃないですか！」

俺の言葉も空しくスピードは更に上がっていく。

いや……落ち着いてくれないと胃の中の物が……「つふ」駄目だ……そろそろ限界だ。

拙いぞ……本気で拙い。このままだと本当に大変なことに……。

「大丈夫だ！俺が絶対に何とかする……！」

だからとつとと肩を揺するのを止めてくれ……！

後半の方は声にならなかつたが心からの願いを込めて叫ぶ。

すると俺の言葉と願いが通じたのか肩を揺するスピードが落ちていいく。

そして料理人は俺の肩から手を離し、諦めたような顔で、

「何とかするつて……どうするんですか？」

と聞いてきた。

その言葉に俺はとりあえず体の調子を整えて、笑みを浮かべながら
こう言った。

「まあその前に作戦会議だ」

こうして図らずも俺と料理人の今後の人生を賭けた戦いが始まった
のだ。

えー現場の徐庶です。現在の焼売飲食事件の作戦会議の様子をお伝
えしたいと思います。

ただいま護守は料理人こと燕里えんり／運命共同体なので真名を交換し
た／と

食べて減つてしまつた焼売を挟んで座つています。

その様子は極めて真剣で、その気迫がこちらにも伝わってきます。
まさに人生を賭けた戦いだとおも……。

「突然頭を振りだしたりしてどうしたんですか？」

「なんか変な電波を受信したって言つた句と何と言つたか…まあ気にしな
いでくれ」

だからそんな可哀そつな田で俺を見ないでくれ。

「…まあいいです。早く作戦を練りましょ」

だからその田を止めてくれ…そんな虫けらを見るよつた田で俺
を見ないでくれ！

そんなに見られる…脆弱の心では耐えきれないほどストレスを
抱えることに…。

いつなつたら早く良策をだして見直してもいいしかないか。

早くも折れそうな心を励まし、情報を集める」とした。

「まず…あとどれくらいで配膳するんだ?」

これが分からなこと作戦もなにもないからな。

「そうですね…あと20分ほどですね」

20分か…短いな…あまり作戦を練る時間もなさそうだしな…。

そんな俺の厳しい表情を見た燕里が諦めたように、

「やつぱつ無理ですよね…」

そう呟いてがつくりと肩を落とした。

いやいや、確かにちょっと厳しい顔したけどさ…

もう少し俺のこと信じてくれてもいいんじゃないかな?

そんなリアクションを取られると何としても助けないとつて思つちまうじゃないか。

「なに肩落としてるんだよ…燕里は俺を誰だと思つてるんだ?」

不敵に笑いながら自信満々に言つて。

そんな問い合わせに燕里は困つたように答える。

「誰つて…食い意地の張つた人としか…」

……食い意地の張つた人?この俺が?んな訳ないじゃないか。

確かに焼売食べたのは俺だけ…

別に腹が減つたから行つた訳じやなく、偶々着つちやつただけだし…。

そりやつまみ食いは止めた方がいいかなーとか思つたよ。

でもいい匂いがしてその料理を食べないのは料理に対して失礼だと思つんだよね。

なにが言いたいのかつて?…結局食い意地が張つてるかもつてこと

だよ。畜生。

「いや……食い意地とかじやなくて俺の職業をだな……」

俺も困ったように言葉を返す。

すると燕里は思つて出したよつと声をあげて、

「確か……万屋でしたよね」

その言葉に再び自信満々な顔をして話す。

「やうだ。俺は万屋で、燕里は俺の依頼人つていう訳だ。そして俺は依頼を受けたなら絶対に完遂する。だから燕里は俺の事を信頼しててくれ。そうしてくれたら俺は必ず依頼を成功させてみせるから」

そつと燕里に笑いかける。

内心では少し格好つけすぎたかな?と思いつつ、

恥ずかしい気分になつて、笑みだけは崩さないよつとした。

すると燕里はしづらへつむきながら肩を上下させた後に、

「アハハハハ！護守さん格好つけすぎですよー。」

堪え切れずに噴き出し、大笑いしながらそんなことを言いだした。

それにしてあんまりだな…。

「ひひひは燕里を元氣づけようとあんな恥ずかしいことを言つたのに…。

いや確かに恥ずかしい台詞だつたけどさ、そんなに笑う事無いんじやない?

「それに元はと言えば護守さんが焼売食べちゃうからいけないのに、信頼してくれつて

アハハハハ！」

燕里は涙目になりながらも笑うのを止めずに笑い続けている。

その言葉に俺の顔は赤くなる。もうひん恥ずかしさでな！

それにしても奇遇だな、俺も今涙目になりかけているといひだよ。お前のせいだな！

あーやばい、顔が熱い。確実に顔赤いよね。なんでこんな状況になつてるんだ?

ああ…もう嫌だ。そりや笑つて欲しいとは思つたけどここまで笑われると最早いじめだよ。

「アハハ…ああ、笑いすぎました。すいません」

燕里が涙を拭いながら謝罪する。しかし笑いながらなので誠意を感じられないな。

「…ああ。本当にな」

俺は不機嫌に返答する。もちろんまだ顔は赤いまんまだ。

そんな俺の返答を聞いて燕里は少し頬笑み顔になり、

「そんなに不機嫌にならないでください。格好良かつたですよ」

なんて事を言つてきた。そして俺はそっぽを向いて答える。

「……ありがとな」

…………でもそんなに直球で言われるとそれはそれで恥ずかしいんだ
けどな。

まあ、やつやみたく笑われるよつかは全然マシだけね。

ちらりと燕里を見る。

その顔にはやつやまでの諦めたような表情はなく、笑顔になつてい
た。

「やつやつ顔を見ると人つて笑顔が一番だと思つよね。

男も女も笑顔だと何倍も魅力的に見えると思つじ。

いやー、恥ずかしい思いした甲斐があつたつてもんだな。

一度としたいとは思わないけどやつて良かつたつて心から思えるね。
一度とやらなければ。

そんな事を考へているとまたしても大きな声で燕里が叫びだす。

「つてこな」とより早く作戦考へてくださいよー。」

「…あつ」

「……あつて言いましたよね？一絶対に忘れてましたよね？！」

「い、いやだなあー、俺が忘れてる訳無いじゃないか」

拙い…完全に忘れてた。どうしようつ…。

折角笑顔だったのにこのままじゅまた震ふれた目で見られちまつじやないか。

ああー燕里の顔が虫けらを見る目5秒前だ！

「さねも「そんな」とよう早くしないと時間が無くなつまつだー。」

燕里が喋つてこる途中に急いで言葉をかぶせる。

適当に言つた言葉だがすでに10分ほど経過しているのも事実なのだ。

よしー何とか話題を逸らす」と成功したな。

「せつでしたー早く話しあわないとー。」「じー何とか話題を逸らす」と成功したな。

そつ自分の心の中で勝利を噛みしめていたと燕里が思い出したように、

「でも、もとはと言えば護守さんが「焼売は一人いくつの予定だつたんだ?!!」

急いで質問をぶつける。

燕里はどんだけ俺の事責めたいんだよ?…もう時間が無いって言ったよね?!

「えつと…一人7個ずつですね」

…7個か。確かに残りが22個あつたな。

食べる人は華琳、春蘭、秋蘭、北郷の4人だからこのままだと一人5・5個になるのか。

ちなみに俺が食べた数は6個だからもう1個食べたら一人分だったな。意味は無いけど。

「足りない分はまた作り直せばいいんじゃないか?」

一番簡単で手っ取り早い解決策を提示する。

もしこれが出来るなら数は揃うし、味もおいしく、みんな幸せになるんだが…。

そんな儘い希望と共に投げかけてみるが燕里は首を横に振ったあと、

「今から作り直すには時間が足りませんよ…」

と残念そうに呟つ。俺はその言葉を聞いた後少し残念そうに話す。

「うへん…やっぱり厳しいか…」

まあ予想はしてたから今までも残念つて訳でもないけどね。

残り時間はあと7分くらいかな…早く決めないとそろそろ拙い時間になつて來たな。

真剣に考えてみる。すべての情報で検討し、いろいろな案を出しては潰しを繰り返す。

しばらく考えると俺の頭の中に一つの良案が浮かんだ。

「……俺に一つ案がある」

この案は危険を伴つが、成功したならすべてがつまへ行く。いわば博打の様な案だ。

俺の真剣な雰囲気を感じたのか燕里も真剣な表情で聞き入る。

「この方法は失敗したら打ち首確定の大博打だ。それでも…俺はやる価値があると思う」

辺りが静寂に包まれる。

燕里はこの方法の危険性と聞いて怖氣づいていたが、しばらくする

と覚悟を決め、

「……解りました。私も覚悟を決めます。…その方法とは一体何ですか？」

燕里の目を見てみるとそこには料理人の目ではなく一人の戦士の目になっていた。

「なんでつまみ食い程度で戦士の目なんかになってるんだ？」

確かに大事だけどそこまで覚悟決める必要はないんじゃないかな？

なんか」のまま謀反とか起「しても不思議じやない雰囲気醸し出してるんだけど……。

「まあ折角固めた決意を鈍らせるのも無粋だし、俺も乗っかったほうがいいかな。

そう思い俺も燕里に倣い、決死の覚悟で方法を説明する。

「その方法とは……俺も一緒に焼壳作って「却下です!!」
「え？」

え？

突然の事に驚いて思考が停止する。

とりあえず燕里に疑惑の目を向けておくことにした。

その視線を受けた燕里は困惑と焦りが混ざったような声で、

「そんな田で見ないでくださいよー護符をなんばじって倒れたか忘
れたんですか?ー」

「びつじつてそりゃ……自分の料理のせいだけ……あれは違つ
んだよー」

「あれは……なんて書つか……そつー悪ノリしそぎたせいなんだよー!」

「おいしく作りといて頑張った手間が結果として全部裏目つただけ
なんだよ。」

「だから別に普通に作れって言われたら作れると毎つよ。……自信
ないけど。」

「それは……俺の料理のせいだけど……大丈夫だつて、ちゃんと作るか
うら」

「そつ根拠も自信もないことなのに頼んでみる。」

「迷つてるときにチラシと聞いた話だと俺には、

「自分の料理で瀕死になつた万屋の馬鹿……なんて不名誉な称号が付い
たらしい。」

「やはつこ」は俺の名誉のためにも焼売をおいしく作つておきた
いといふのだな。」

「そつすれば俺の不名誉な称号も消えるだひつし……よし頑張ろうかな。」

そう心の中で息巻いていたが燕里の返答は、

「駄目に決まってるじゃ ないですか！！死人を出すつもりですか？」

「！」

と言つ散々な結果だつた。

つて言うか死人はないだろ死人は……行つても重体者までだつて……それも拙いか。

まあ俺が作つた料理で華琳達が倒れたら後味悪いし、もしさんなことになつたら確實に打ち首だしやらない方がいいだらうな。

そう考へて諦める」とこした。

「でもどうするんだ？もつ時間もないしそろそろ決めないと拙いぞ……」

時間も残り少ないし考へも浮かばずに音をあげると燕里が、

「……提案があります」

ひとさつきとは違つた決意の籠もつた表情で言つ。

俺はその表情が気になつたが続きを待つた。しかしその続きを恐ろしいものだつた。

「第一この事件の発端は護守さんですよね？だつたら責任を取つて

もりうのが筋だと

思つたです。つまりですね……護衛さんを曹操様に売つて「ふざけんな！！」

思わず声を荒げて燕里の言葉を遮る。

確かに俺のせいだけじゃの仕打ちはあんまりだと思つんだが……。

しかもその提案だと最悪俺死ぬ事になるんだけ……それでもいいのかよ……。

しかし燕里は机を叩きながら立ちあがつて、

「じゃあどうして言つんですか？！時間も無い！案も無い！焼売も無い！」うなつたら護衛さんを曹操様に突きだして自分の身の安全を確保するしか無いじゃないですか！！」

その言葉に俺も立ちあがつて、

「分かつた！すぐ考えるからそんな早まつた行動はしないでくれ！」

と懇願してみるが燕里は冷静な声で、

「もう時間も2分くらいしかないんですよ。この状況で思いついたとしても行動する時間なんて無いと思いますよ……」

と言葉を聞きながら考える事にした。

わざわざあるか……問題は華琳達の焼売の数を元に戻すにはどうす

るかつてことだよな……。

でも作り直す時間は無い……こんなのが不可能だ……絶対に思いつかないつて……。

……もう燕里に罪全部擦り付けて国外逃亡「じけゅあうかな……いや絶対そんなことしないよ？」

……そう言えば街こすいへおいしげて評判のお店が出来たつて前に聞いたな……。

まあ金は結構取られるらしいんだけどね……つてそんなことどうでもいいんだよ！

今はじつやつて焼売の数増やすかつて考えてんだから……つてやつてだ！

今から買ひに行けば……無理か……時間がかかりすぎるな。

ああもうー…どうすればいいんだよ——！

やつこじつこじつてゐる内に燕里が残念そう

「……そろそろ配膳の支度をしないといけないので……覚悟決め
ておいてくださいね」

と最後に不気味な事を言つて焼売を5個ずつ蒸籠の中に入れ、3つをカートみたいなやつに乗つけて、もう1つは別のカートみたいなやつに乗つかけた。

その事を不思議に思い質問してみると、

「これは曹操様と夏侯姉妹様用で、こつちは北郷様用です」

この答えを聞いた時に俺の頭にある一つの考えが浮かんだ。

この考え方なら一瞬で華琳達の焼売の数は7つになるし味も変わらない。

早速この考え方を燕里に伝えてみると驚いた後に、

「た、確かにその案なら行けるかもしねないですけど… そんな事して大丈夫なんですか？」

と尤もな意見を言われたがもう議論をしている時間も無いので押しきらせてもらひつー！

「大丈夫だつて… いざつて時には俺が責任取るからー！」

と真剣な表情で訴える。

…まあ、もしされても言い包める自信があるから言つてるんだけどね。

5年間も腐れ役人達の仕事やつてると嫌でも口が達者になるからな

…。

口がうまくないと報酬が貰えなかつたり、追加で人殺したり、なんか知らないけどこつちが金を払つことになつたり…… ああ… 思い出しだけで泣けてくるな…。

と昔の事を思い出していると燕里が、

「分かりました…じゃあ早く準備しましょう」

と言つて準備を始める。

やがて準備が終わると燕里は、

「じゃあ私は曹操様方の分を運びますから、北郷様の分をお願いしますね」

と言つてお辞儀をした後にカートを押して厨房から出て行った。

前を見てみるとカートがあり、上には蒸籠が乗つていて中からおいしそうな匂いがする。

そのカートの取つ手の部分を握り厨房を出て北郷の部屋に向かう。

その道中、何人かの兵士に遭遇したが皆驚いた後にヒソヒソ話を始めた。

ヒソヒソ話に聞き耳を立ててみると、

「まさか徐庶さんが…」とか「また死人が出るのか…」とか「…南無阿弥陀仏…」などと勝手な事を抜かしていた。

そんな話を聞いた時は思わずカートごとぶん投げてやるうかと思つたがギリギリで思いとどまつた。そのせいで取つ手の部分にちょうど良い握る場所が出来たけどな。ケツ！

そんな道すがら小さな声で呟いた。

「……………今度からつまみ食こある時せひやんと許可を取れり……………」

そんな通り前の事を呟きながら一人北郷の部屋を出撃す。

…………今度はひやんと通りつつかるといこんだナビなあ～。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9044p/>

真・恋姫†無双 転生万屋さん

2011年10月8日13時44分発行